

42226

教科書文庫

4

810

42-1926

200030
1727

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

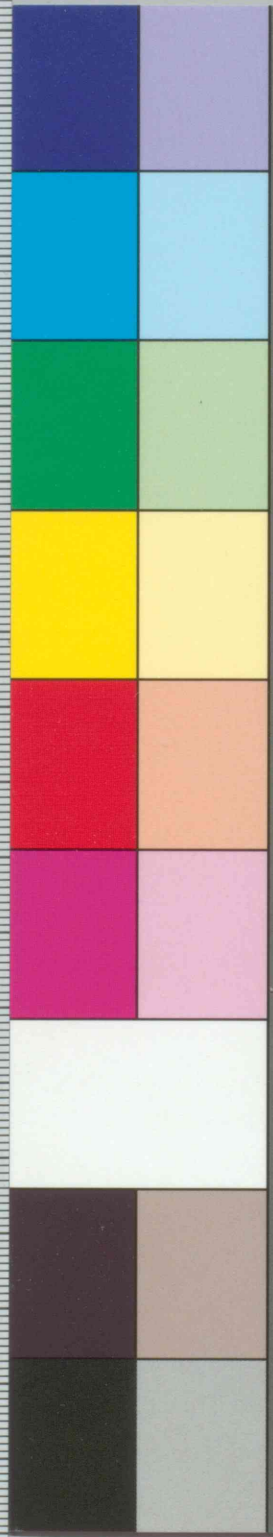
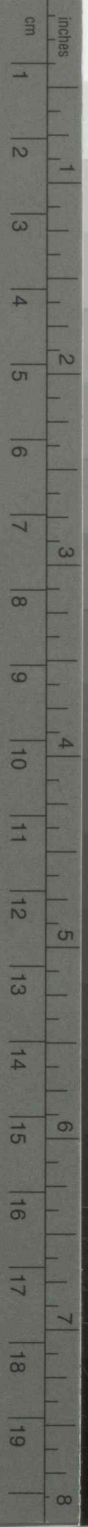


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Hi19
資料室

女子新讀本 卷六



395.9
H119

文部省檢定濟

大正十五年十月二十一日 高等女學校國語科教科書

東京帝國大學助教授久松潜一編



新讀本



東京 至文堂



女子新讀本 卷六

目次

一	感謝	吉田絃二郎	一
二	車上半日記(一)	綱島梁川	五
三	車上半日記(二)	綱島梁川	二
四	自然と我が國民性	藤岡作太郎	七
五	忘れがたき人々(和歌)	石川啄木	五
六	佛法僧	高濱虛子	二九
七	ジヤンヌダルク	高山樗牛	四四

目次

八 女流俳人……………荻原井泉水…五

九 琴(韻文)……………與謝野鐵幹…壹

一〇 四時の變遷……………大町桂月…六

二 水 郷(一)……………北原白秋…七

三 水 郷(二)……………北原白秋…八

三 一羽の雀……………吉江孤雁…六

四 幻影……………吉江孤雁…九

五 尊皇の精神……………芳賀矢一…四

六 正直であれ……………吉田絃二郎…一四

七 故郷の花……………(平家物語)…一〇九

八 少年……………野上彌生子…一三

元 冬より春へ……………島崎藤村……………一三

(一) 春の先驅…………………………一三

(二) 星…………………………一三

(三) 第一の花…………………………一三

(四) 山上の春…………………………一四

二〇 早春……………三木羅風……………一四

(一) 水邊小情…………………………一六

(二) あぜ道…………………………一九

二一 忘れ難き日……………姉崎正治…一三〇

二二 高 館(一)……………笹川臨風…一三五

二三 高 館(二)……………笹川臨風…一四〇



女子新讀本 卷六

文學士 久松潜一編

一 感謝

私は今地の上に立つてゐる。

芝草は紅葉して秋の日を浴びてゐる。素足の指に觸れた地は、眞冬の寂しい眠を想はせるほど、冷たく、静かである。私は小暗い木蔭の下に立つ。

四十雀の聲、翡翠の聲、すべて秋の聲はあまりに静かである。

目次

終

二四	晚春の別離(韻文).....	島崎藤村	二四
二五	鳳凰堂.....	谷崎潤一郎	二五
二六	山川の今昔.....	田山花袋	二六

る、秋の雲のやりに。

私は小鳥の聲を聴く。

どこからあの美しい、あの静かな、獨語の聲が生まれて來るのか。聲と言つてしまふには、餘りに美しい、餘りに清淨な聲である、唄である。

私は芝草の上に立つて空を眺める。

何といふ偉大な、そして閑寂な雲の影であらう。

眠りかゝつた午後、空を、絹のやうに白い三條の雲が、水平にためらうてゐる。

樺の上の空には、無数の綿をちぎつて捨てたやうな雲の群がある。

見てゐる間に形が變つて行く。色合が變つて行く。

何といふ偉大な、何といふ無限な自然であらう。

私はただ驚に打たれるばかりである。私は私が生きて空を眺めてゐることを、ほんたうにうれしいと思ふ、あり難いと思ふ。

草紅葉した原の上に、小さな丘がある。そこには、紅と白と薄桃色の山茶花が咲いてゐる。黄ばみかゝつた銀杏の樹、紅葉した櫻、下葉の焦げたひば、檜杉などが、山茶花の背景を作つてゐる。更に水のやうな秋の大空が、遠景を作つてゐる。そしてこのやうな光景をば、渾然として、或一つの豊かな色、一つの調子が包んでゐる。いや、無限の色である、無

限の調子である、掘つても掘つても掘盡くすことは出来ぬ。
 私は枯草の上に坐つて、この豊かな自然を眺めてゐる。
 私が百年生きてゐたとしても、無限に生きてゐたとして
 も、この自然の美しさは、神祕は、感じ盡くせないであらう。
 私の魂はこの自然の美と神祕に咽びさうだ。
 私はこの世界に生きてゐることを感謝せずには居られ
 ない。
 私の足の下に白い野の花がある。見よ、私の頭の上の梢
 に、最後の葉が落日の光に顫へてゐるではないか。
 ただそれだけのものの中にも、生きて行くことの尊さ有
 難さを思はせるものが十分ある。

地の上に靄が下りて來た。
 かけすの聲、翡翠の聲、何といふ音樂的な聲であらう。
 私は、靜かにその聲を聴きつゝある私自身の生活を、祝福
 せずには居られない。
 (吉田絃二郎)

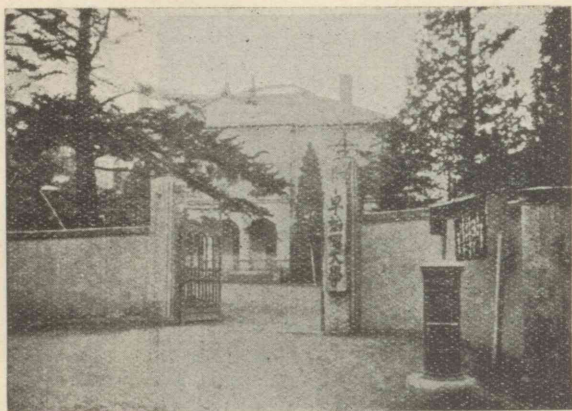
二 車上半日記 (一)

うれしき秋は來ぬ。秋はわが復活の節なり。いでや、い
 ぶせき方丈のふしどを立出でて、半日の興を西郊の秋に探
 らばやと思ひ立ちては、心は早く空明の野を行きて、尾花刈
 萱の浪とぞ亂るる。幸けふは身うちに熱もなく、心地清々
 しければ、ただちに人車僦ひて出で立つ。天長節の前二日、

午後一時なり。

昨宵まで打ちつづきたる秋霖、名残りなく晴れて、路べの
檜垣・杉垣におく玉にも、瑠璃色の空の心深く、煩惱の塵靜か
なる大路・小路の美しき日なり。いづこと定め指さねど、人
車の脚のおのづから思出多き早稻田の里へと向ふもをか
し。^{*}喜久井町の坂を下りて、馬場下あたり、車上逢ふところ、
三々五々、概ねこれ早稻田大學の學生なり。高襟式なる、學
究式なる、優雅の眉匂へる、木強の鼻怒れる、人さまざまの姿
はあれど、おほかたは一樣の制服・制帽のいかめしきに、ひし
とよろひかためて行く。多かる中に、わが見知れる顔一つ
だに無きが淋しけれど、七年八年が程を隔てての今、我槎

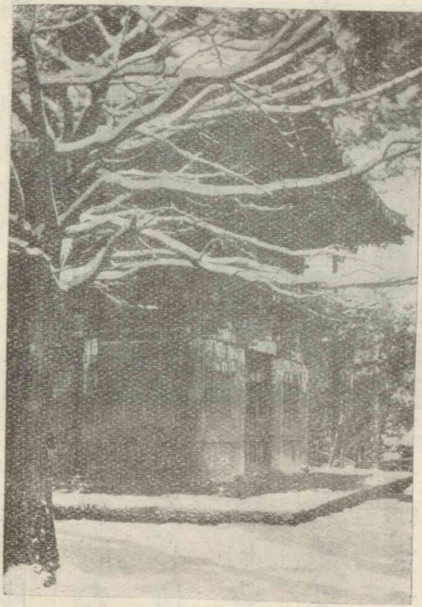
^{*} 東京市牛込區の西
^{*} 東京市牛込區内の
町名



早 稻 田 大 學

として枯れたる魂を抱きて、ここに同じ學舎の光を慕ふ人
人と相見る、いかで感慨なからむ。思はいつか昔を辿りて、
懐かしき舊友の某々、さてはわが
當時の面影さへ、臚に街上に見ゆ
る心地す。向ひに聳ゆる新大學
巍々乎として崇いかな。さはい
へど、早稻田田圃・櫟林・早苗・螢・茗荷
畑、さては彩雲の蓮華の田の面、渺
渺たる田ごとの霧の神秘など、を
りふしごとの自然の風物を趣味・
觀念の窓に眺めたる古き學び舎のほこり、今ありやなしや。

われ一向に舊を揚げて新を貶めいふにあらず、ただ姿謙りて朴茂たる趣味饒かなりし舊き學舎の、すずるにしのび出でらるるを如何にせむ。穴八幡の森を左に見て、名所は山

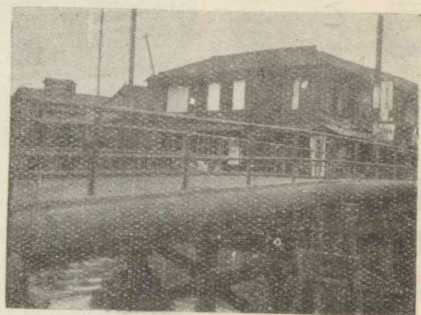


穴 八 幡

吹の里に、俳句の嗜み深かりし友の舊棲廬をしぬび、それより車脚徐ろに蛇行して、長閑なる田舎路に入る。

このわたり、思出の心の絃の繁きが中に、わきてなつかしきは、曾て同じ學びの窓の同じ机に、同じふみ繙きたる薄倅の人故古白子の假住ひ

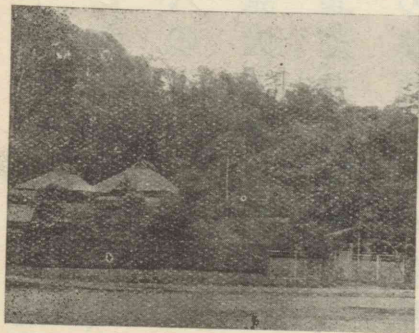
の跡なりけり。古白好みともいふべき浮世隔てたる閑寂の一構、窈然と景色遂き屋後の木立庭のたゞずまひなど、ありし昔とつゆ變らぬさへあるに、下宿人の名標二つ三つ淋しう軒に懸りたる、さては外面より打見入りたる家内の板敷、調度などの、清らに塵一つだになきまで、昔のままなり。げにこの家ぞ、彼が破れ易き夜半の夢の懊惱をば、今朝見れば淋しかりし夜の間の一葉かなと誦みすて、われとわが限りなき痛恨の涙を嘲りし跡にはありける。あはれ、多感の幽魂は俳諧の遺韻拾はむとて、今もなほこゝに飄遊することありやなしや。車上低徊の感多時。路を右に取りて面影橋の袂にいでぬ。眼界や、豁然、右は彼方の櫟林の間



橋影而

に朧に打見やらるるに芭蕉庵ゆかし
く、左は廣やかなる稻田の黄雲低う打
ちなびきたるこなた小高き丘の麓に、
折からの秋日の中に、田舎家三つ四つ
五つ聲もなうしほらしうぞ打ちなら
びたる。いくそ

の行人の面影に親しみけむ、問はまほ
しき此方の流れの左岸一帯、荆棘まじ
りの林の木、枝に暴風雨のあとの名残
しるく、瘠せ細りたるが、やゝくねりご
こちに一方に打靡きたる、何となう雅



庵蕉芭

邦集中の枝ぶりを見る心地す。かゝる枝ぶりぞ、荒涼たる
うちに、一ふし強き調子をそなへて、わざとならぬ力の人を
撲つなりける。總じて秋の自然の美は力の美なり、生動の
美なり、骨勁神蒼の美なり、内容の形式を躍如と破り出でた
る美なり。

三 車上半日記(二)

かゝる事思ひつづけゆくほどに、車はいつしか橋を渡り
坂をのぼりて、目白臺なる一街に出でたり。左して雑司ヶ
谷の鬼子母神に詣ても、消間のすさびごころは、神の享け
させたまふまじと思ひかへして、右の方へと車を遣る。こ

の街のさま、田舎街の野趣もなく、さりとして都に近き営みのいきほひもなく、平板極りなきに倦んじつゝ行く。程なく



神母子鬼谷ケ司雜

街の右側に小やかなる空地ありければ、試みに車を寄せさせけるに、枯芝生軟かに夕日に眠れる目白臺つづきの丘の上にと出でたり。牛込の街々を一眸に眺めたり。彼處の建物は早稲田大學、彼處は矢來の酒井氏の森と、一車夫の指し示すに、唯見る、一氣莽々蒼々の中、萬家の覺見え隠れして、いづこともなき群動、ただこゝもとにと打寄せ來る心地す。薄墨の縁とりたる白雲、

波濤の勢をなして遙かなる牛込臺の地平の大環を描きぬ。あはれ、紅塵萬丈とぞいふなる都大路の熱鬧をも、悠悠支配して、永へに靜かなる大自然のさまよ。われらが自然を支配すると誇るなる文明の営みをも、神は資つて自然の一點綴としたまふなりけり、さにはあらじか、など自ら肯きつゝ復もとの街を右へと行く。

女子大學の建物ゆくての樹間に見えて、折からの風琴の音、窓の夕日に冴えたり。この學校の女生徒とおぼしきが三人ばかり打揃ひて、例の鰻茶の袴に靴音高く彼方より來るに、やゝ後れて淺ましう瘠せさらぼひたる四十路ばかりの男の盲ひたるが乳飲子を負ひて、右手を小兒に取られつ

つ、蹠跟として歩み來たり。ゆくて花やかなる運命にほゝ



校學大子女本日

笑みてゆく女生と、黯懨たる運命の重荷に喘ぎつゝ、ゆく貧兒と、この眼前の對照は限りなく我が心を傷ましめぬ。いづれは同じ貴き魂の、一つは落ちて暗黒不幸無き、知罪惡の胎に宿り、一つは落ちて、光明文雅幸福教養の胎に宿る。誰か眞にこの深き矛盾の心を釋く者ぞ。あはれ、若し我に一切の險を夷とし、惡を善とする大能者の信なくば、車上しばらくは迷々の鬼となりしなら

むを。

舊公爵山縣有朋邸

やうく心に心の惱み押し鎮めて、例の椿山莊の門松を右手に見つつ行く。前路に車止めありと知らするものありければ、落葉林の細道を左に分け入りぬ。夕日華やかに木の間を洩れたり。かさこそと音する葉ごとと葉ごとの秋の心沁み入るばかり温かに、その樂しみ融々たり。左手に形ばかりの生垣ゆひめぐらして、滿庭をふりうづむる落葉の狼藉にうち任せたる古風の草の家一つ立てり。かかる處に都離れたる閑寂を友として心にくく住みなす人もありけるかと、嵯峨野栗栖野の昔をさへぞ想ひ出でらるる。藪疊のかげなる小暗き坂通を下りて、小石川なる音羽町

にいづ。水道町に出て矢來の方へと通ずる新開町に行く。車夫の語るを聞けば、このわたりは早稻田田圃につづく沮洳の低地なれば、雨強きをりは忽ち一面の湖を湛へて、人々皆船にて往きかひするなりとぞ。われ、さるにても昨日、家を捨て、遁げ惑へるをも打忘れて、けふ雨晴れ地乾きぬれば、忽ち復絡繹の塵を揚げつゝ、生活の営みに餘念もなき人の心ぞ、げに營々たる蟻の心にも似たりけるといへば、車夫の打ち興じていふ、仰せの如くまことの人間が蟻の群にても候はば、蟻を乗せて走る我儕が営みは、何に譬ふべくもや候はむと。この奇矯なる言葉に、われも笑ひぬ、彼れも笑ひぬ。歸りしころは、軒の燈、淋しげにあるじを迎へがほなり。

(綱島梁川)

* 名は榮一郎
文士
明治四十年歿

四 自然と我が國民性

國民の特性は、初よりその人種に固有なるものありと雖も、またその住處の地勢氣候によつて馴致せられ、變化したるもの少からず。そのもと同じき印度歐羅巴種族が、東洋に、西洋に分れて、寛猛柔剛、匹を異にする種々の國民と成りたるは、南國の日北地の風、山海さまざまの風物が、これを養ひたるなり。日本國民が全一體としてよく統合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接する國なき、その地位に影響せられしこと少からざるべし。

日本は東洋の樂園と稱せらるゝこと、歐洲に於ける伊太利、瑞西の如し。氣候中和にして、山水明媚、瘴烟毒霧の襲ふことなく、猛獸毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原、眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流數百里の山野を浸すを見ず。雄大瑰偉なる大陸的風致に乏しと雖も、至るところ優麗嫺雅なる勝景に接す。東海の岸を縫うて進めば、富士を前にし、富士を後にして、長汀、曲浦、浪靜かに砂滑かなり。瀬戸内海に船を行れば、松の島を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日、夕日に移らふ景趣は應接に暇あらず。陽春櫻あり、晚秋菊あり。初夏の梢にかゝれる藤波は、紫の綾を池水の鯉に織り出し、冬季の森、鶉の聲暗き蔭に、紅の椿は拾ふ兒なしに切りに落

つ。美なるかな山河、これに接するものは怒れる心も和ぎ、結べる思も解けて、愛賞に他事なきを得ず。山川は優美なり、穩和なり。これに馴れ、これを愛する國民が、また優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、即ち自然の感化の致すところなるべし。日本の土地は孔雀を生ぜずして、雉子を産す。國民の性もまた孔雀の姿の如く濃艶ならずして、雉子の如く淡泊なり。悲憤の情、時には火の如く燃ゆることありと雖も、概するに稟質猛烈ならずして、穩健に、執著せずして、洒脱なるも、また外圍の風物が漸次に養ひ來れるものならんか。

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れ

ず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美・溫和なる山川は常に臉上に愛を湛ふるが如し。接するものはこれに親しみ、親しむものはこれを慕ふ。愛に迎へらるるものは、愛に酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民が、その一木一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の縁日に張りたる夜店には、食品も玩具も數ふるに足らず、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅こそ、カンテラの光に映えて、水々しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて、座敷に飾り、庭に植ゑ込む。裏長屋の道具の据ゑ所もなき窓前にも、稗詩を作りて、田舎の景色の面影を偲

び、破れ鉢に唐の芋を育てて、やさしき野趣を楽しむ。長火鉢のわきの福壽草は鏡餅に對して暖げに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下・貴賤を通じて、自然を愛すること此の如きは、他の國民にその匹ありや。

我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず。自然の愛すべきを見て、恐るべきを思はず。野をも垣をも吹き亂す二百十日の風も、野分の名に優しく、峰をも谷をも一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり。荒き猪も臥猪の床と稱ふるにやさしく聞ゆなど兼好がいへるは、我等の自然に對する態度を説明せるなり。雨といへば、照り續きたる夏などは嬉しけれど、一日の

*徒然草「恐ろしき
るのしゝも臥猪の
床といへばやさし
くなりぬ」

降りも十日の照りより飽きく、するに、卯の花くたし、時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。自然の愛はかくして表るのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふることあり。文章には、源氏物語の卷の名に、夕顔、末摘花、葵、柗、朝顔、胡蝶、螢、常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴蟲、紅梅等の類多く、これより源氏名の稱は起れり。我等はまた日常の用品にも、自然より出でたる名を用ふ。菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅焼、時雨など枚擧するに暇あらず。今の煙草にも福壽草、白梅、皐月、あやめ、萩、紅葉等あり。古くは獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へいひしもやさしからずや。斯くの如き類は指を屈するに随つて想ひ出づべく、いづれも國民の自然を昵愛する

ことを示すものならざるなし。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よくこれを尊重せり。尊重するものには悦んで服従す。彼等は漫に人工の手を加へずして、自然のままに自然を仰ぐ。この服従を以て屈伏といふ勿れ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは、不平なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは、從順なる兒孫が寛仁なる家長を見るが如し。任意的なるものは、毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意となす。花を愛する趣味の、我等がいかにか西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら、幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳

しきなり。櫻は一枝の趣を賞するよりも、峰に亘り、川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もそのまゝに、願はくはこれに置ける朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて、歡興を助くるに、一は床上の盆石・盆栽に、自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨繪との異なるが如し。同じ菊を見るにも、彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋草花のチウリツプ・ピアシンスなど、その葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼には毒々しと

感ぜらる。秋の野の女郎花・尾花、その花に何の美はしきことかある。されど、あるかなきかの黄花を捧げて、なほたよたよと下蔭の蟲の音にもゆらぐさま、ますほの色はやがて白くほゞけて、霧に濡れ、風に靡く趣は、我等が胸に浸みて忘れられず。日本人が花を愛するは、その外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり、直ちに自然の懷にわけ入つて、その眞意義を握るにあり。かくしてこそ、自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ我が國民の特性なり。

*(藤岡作太郎)

五 忘れがたき人々

*文學博士
國文學者
明治四十三年歿

潮かをる北の濱邊の砂山の
かの濱薔薇よ今年も咲けりや。

三度ほど汽車の窓よりながめたる
町の名などもしたしかりけり。

目を閉ぢて傷心の句を誦してゐし
友の手紙のおどけ悲しも。

漂泊の愁を叙して成らざりし
草稿の字の讀みがたさかな。

函館の臥牛の山の半腹の
碑の漢詩かたもなかば忘れぬ。

むやむやと口の中にてたふとげの
事を呟く乞食もありき。

演習のひまにわざわざ汽車に乗りて
訪ひ來し友とのめる酒かな。

さりげなき高き笑が酒とともに

我が腸に沁みにけらしな。

大川の水の面を見るごとに、

郁雨よ君のなやみを思ふ。

欠伸噛み夜汽車の窓に別れたる

別れが今は物足らぬかな。

雨に濡れし夜汽車の窓に映りたる

山間の町のともしびの色。

雨つよく降る夜の汽車のたえまなく
雫流るる窓硝子かな。

しんとして幅廣き街の秋の夜の
玉蜀黍の焼くるにほひよ。

かなしきは小樽の町よ、

歌ふことなき人々の聲の荒さよ。

* (石川琢木)

* 名は一
歌人
明治四十五年歿

六 佛法僧

「雨月物語」を見た人は、高野山といへば一番に佛法僧鳥の

事を思ひ浮かべるであらう。此の鳥は日本國中二三の名山のほか居らぬ鳥で、中にも高野の奥の院に啼くのが特に名高い。弘法大師の詩に

閑林獨坐草堂曉、三寶之聲聞一鳥、一鳥有聲人有心、
聲心雲水俱了々。

とあるやうに、其の啼き聲がぶつばふ、そ、う、と聞えるさうで、法の御山にふさはしい靈鳥として、特に持て囃されてゐる。是に於てか秀吉の歌といふに、

傳へにし鳥も御法を行ひの
聲は高野に有明の月。

とかいふのがある。公卿僧侶の歌は固より澤山ある。中

にも上田秋成は此の鳥に豊臣秀次の幽靈を配して、雨月物語の一章としてゐる。其の物語は趣味ある文字として、嘗て愛誦した事があつた。

「今夜奥の院に行つて佛法僧の啼き聲を聞いて來るから提灯を貸してくれ給へ」と給仕の小僧さんにいふと、畏まりましたと小僧さんは笑ひながら、膳を下げて降りて行つたが、幾ら待つても來ない。一時間も経つてから、本當に行くのですか」と聞きに來る。「勿論本當に行くさ」と答へると、途中で何か出ますよ」といふ。「何が出る。猿でも出るか」と聞くと、新墓から幽靈が出ますよ」といふ。晝間通つて見た時は大名などの舊い墓ばかりが目に着いたが、成程中には新

墓もあらう。「新墓の幽靈位屁でもない」と元氣な事をいうてやる。小僧さんは又氣味の悪いいやな笑ひやうをして降りて行つたが、暫くして二つ巴の紋の附いてゐる大きな提灯を持つて来る。さうして「幽靈の外に野衾も出るさうですから氣をおつけなさい。若し二時間も経つてお歸りが無かつたらお迎に行きます」と洒落れた事をいふ。

小僧さん自身に提灯をつけてくれて、表門は締めてしまつたから、裏口から御案内しませう」と先に立つ。此の小僧さんは十六だといふに馬鹿に背が低い。其が大きな提灯を提げてゐるので、少くとも芝居の土蜘蛛に出て來さうな恰好だ、下駄を穿いて臺所の横にまはる。廣い臺所には

一つ灯がともつてゐるばかりだ。暗やみの中に、二三人の小僧さんが笑ひながら我等を見送つてゐる。其が提灯の光で僅かに見える。

がりくくくと音がしたのは、お城で見たことのあるやうな岩疊な裏門のくぐり戸を、小僧さんが先に立つて開けてくれた時、鐵の鎖の戸に軋る音であつた。小僧さんが突き出す提灯を受取りながら表に出る。表は暗い。星はあるが、僅かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提灯を便りに其の白い土塀に添うて表通りの奥の院道に出る。門前の珠數屋ももう戸を下してゐる。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩するやうな大木

が、襖の如く連なつてゐる。其の左右の襖でたて切つた中に、帯のやうに狭い空が見える。其の空には星が光つてゐる。平生見る星よりは形が大きい。而も其の一帶の星の光では、我等の行手を照らすに足らぬ。我等は提灯の光で僅かに足



高野山の雪の奥の院

許を探つて歩く。晝間は氣が附かなかつたが、縦横に道を横ぎつてゐる木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は左右に延びるに随つて隆起して、終に杉の大木に集まつてゐる。未央君は提灯をさし上げて、其の木の幹に押しつけるやうにして歩く。未央君が三間ばかり歩いて、まだ杉の半面を照らし盡くさぬ。夜の杉は大きさのわからぬ巨人の如く突立つてゐるのである。寝鳥の立つ音がする。見ると、提灯の上から圓筒の如く、丸い光が空中に射出されて、其が高いく、杉の梢を彷徨うてゐる。寝鳥が泡を食ふのも尤もだ。歩きながら、未央君に「雨月物語」の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つともつてゐる。何處やら心細くなる。斯ういふ時に野衾が道を塞ぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥に、薄ぼんやりと

明るいものが見える。何であらうかと氣にしながら行く
と、突然木の間に空が見えて、其處に鎌のやうな三日月がか
かつてゐる。

向うからふら〜と提灯が一つ来る。急に見えなくな
るのは、杉の木に隠れるのであらう。直また現れる。近づ
いて見ると一人の老僧だ。すれ違ひ様によく見ると「釣狐」
の狂言に出る白藏主に似てゐる。

行手に燈籠らしい灯が三つともつてゐる。近寄つて見
ると御廟の橋だ。未央君が橋の上から提灯をつり下げて
水面を照らして見る。玉川の水は火を受けてちら〜と
流れてゐる。燈籠堂はもう直其處に在る筈だが、眞暗で其

らしいものは見えぬ。怪しみながら近寄つて見ると、すつ
かり四周の蔀を下して、寂然として寢靜まつてゐるやうだ。
數百の燈籠のともり連なつてゐる夜の景色は、淋しくも嚴
かであらうと思つて楽しみにしてゐたのに、これでは唯眞
黒な大きな建物を見るばかりで物足らぬ。燈籠堂に添う
て御廟の前に出る。

御廟の前も眞暗だ。唯廟前に左右六個の小さい釣燈籠
がともつてゐる。其の光で、僅かに御廟の屋根と二三本の
杉と線香立てとが見える。此の線香立てには、晝間見た時
は煙が雲の如く渦巻いて居つた。其の煙の中に珠數をく
すべたり、鈴をくすべたりしてゐた信者が、今は一人も見當

らぬ。人間が居らぬばかりでなく、今は一條の煙も昇つてをらぬ。提灯を其の中に突込んで覗いて見ると、冷たくなつた灰の中に、線香の燃え滓の赤い紙が四五本、残骸を留めて居るに過ぎぬ。晝間見た時も大きな線香立てだと思つたが、寂然として静まりかへつた所を見ると、愈、偉大な線香立てである。

燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。我等を少し離れて、縁に置かれた提灯の灯が心細さうにまたゝいてゐる。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内でも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺はない筈だが不思議だと思ふ。其の鉦の音に聴きほれて

ゐると、忽ち近い木の梢でけたゝましい鳴き聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帯びた聲だ。襟元から手を突込んで背なか中を搔きまはされたやうな氣持になる。鉦の音はまだ聞えてゐる。鉦の音はよい音だが、今の鳴き聲は眞平だと思つてゐると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天狗のやうな嘴をした鬼のやうな手をした鳥で、忽ち空中から落下し來つて、提灯をさらつて行くやうな事はあるまいかと氣になる。氣のせい、か、提灯の灯は一層心細さうに瞬いてゐる。

小さい咳拂ひが聞える。おやと思ふ内、又一つ聞える。其の邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に一寸し

た明りがある。此處は晝間線香などを賣つてゐた處であるから、直に番人の部屋と想像がつく。試みに其の傍に行つて、「もし〜」と呼んで見る。「へい」と返事をする。「一寸伺ひますが、あの恐ろしい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸です」といふ。「へえ、何といふ獸です」と聞くと、「野衾」といふて、蝙蝠のやうな、鼯のやうな、妙な恰好をした獸です」といふ。あれが野衾かと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つてゐるやうですが、あれは何處ですか」と聞く。番人は一寸黙つてゐたが、あれは鉦ぢやありません、鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です」といふ。鉦の音かと思つてゐたのが、鳥の鳴き聲であつたのは意

外であつた。殊に其を聞かう爲に來た佛法僧であつたのは、愈意外であつた。「あれが佛法僧ですか」といつたまゝ、暫く無言で二人とも耳を傾けた。やはりカン〜〜〜と鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますと、カンと響く前にブツといふ低い音が聞える。ブツと低く響いてからカンと高い沓えた音が響く。つまり、ブツカン、ブツカンと鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物には文字通り佛法僧と鳴くとあるが、雨月物語には佛法といふ字に態、「ぶつばん」と假字が振つてあつて、ブツバンブツパンと鳴くと書いてあつたやうに記憶する。實際の鳴き聲はブツカン、ブツカンと聞えるが、先づ「雨月物語」のブツパンに

近いやうだ。妙なもので、初は鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初鉦の音と聞いた時も、嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を連想したが、これが生物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に濕みのある事に氣がつく。番人が「大概夜中の二時か三時頃にならぬと鳴かぬのに、今晚は宵の口から頻りに鳴いてゐた」といふ。さういふ内も絶えずブツカン、ブツカンと聞える。普通の鳥とは餘程違つてゐる。法の御山の靈鳥として恥づかしからぬ不思議の鳥だ。古來幾多の詩歌がこれを持って囃したのも尤もだ。私は嘗て高野の山の靈山であることは奥の院道の杉並木

で證據立てられるといつたが、否々杉はものかは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。見ると遙彼方の縁に置かれた提灯の灯も今は靜かにともつてゐる。番人は淋しい燈籠堂の夜陰に偶話相手を得たので、問ひもせぬのにいろ／＼話をす。どの話も耳新しく面白かつたが、中にも此の燈籠堂で焚く油は夥しいもので、月に一石から二石の間を往來してゐる、殊に三月二十一日の御影供の時は、一日に一石の油を焚くといふ事と、貧の一燈の灯は信者の所望によつて線香に移してやる、其を北海道や九州あたりまで持つて歸る、中には途中で消えたといふので大阪あたりから又引返して來る人もあるといふ事などは

面白かつた。

ふと氣がつくと、佛法僧は何時の間にやら鳴かぬやうになつてゐた。唯野衾が時々荒膽をひしぐやうな鳴き聲をする。歸途に着く。

御廟の橋にかゝつた時、未央君が「また鳴く」といふ。向うの墓原を縫ふやうに提灯が一つ来る。女が三人に男が一人、南無大師遍照金剛と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。

*名は清
佛人
小説家

(高濱虚子)

七 ジャンヌ、ダルク

今を距る四百餘年前、佛蘭西國と英吉利國と事ありて干

戈を交へし事ありけり。佛國の武運や拙かりけん、連戦連敗、土地は侵され、城壘は陥れられ、國王は邊陲に蒙塵し、誰ありて興復の偉業に當る者あらざりき。今や佛國の唯一の頼みとせしオルレアン城も、存亡旦夕に逼り、さしも雄大なりし是の國の社稷も、今を限りとぞ見えにける。

斯くて佛國の運命はオルレアン城の上に懸りたり。是の城にして陥らば、佛軍は其の最後の根據を失ひて、佛國の社稷は永く其の祀を絶たん。されど大厦の覆らんとするや、一木の支へ得べきにあらず、所在の將士意氣沮喪し、其の敗軍を擁して、徒に憤慨の日を送りけり。

將軍ロベールはチークルユールといへる所にあり。一

日佛國の前途を想ひて憂慮に沈みける折柄、容貌秀麗なる一少女の鄙びたる衣裳を着けたるが、其の營に至りて佛國の救ひの爲に來れりと告げぬ。これぞ後オルレアンOrléansの運命を救ひし、ドムレミーDomremyの羊飼ひ女ジャンヌJeanne、ダルクDarcな



像肖クルダヌンヤジ

りける。

將軍は飽くまでジャンヌを一狂女なりと思へり。引見して試みに其の言を聽けば、わらはは神の示現によりて、佛國の危きを救はんが爲に來れるなり」と答ふ。其の舉止動作、強ちに狂人とも見えざれば、重ねて「其の求むる所如何」と問へば、ジャンヌは次ぎの如く答へぬ。

「將軍よ、わらはの言を信ぜよ。神は數年前よりわらはの前に現はれて、幾度となく「佛國の危難に赴き、是の國のまことの王なるシャルルを助けよ。」と告げ給ひぬ。將軍願はくはわらはは一隊の兵を假せ。わらはそを率ゐて直ちにオルレアン城の圍を解かん。將軍疑ふこと勿れ、是神の命ずる所なり。」

熱誠面に顯れ、一種の神采人の心を壓して、さながら古の豫言者も斯くやありけんと思はるゝばかりなりければ、將軍を始め、並み居る人々は、そぞろに畏敬の情をぞ起しける。されど教育無く、門地無き牧羊者の小娘子の身を以て、よしや神通の威力を具へたればとて、今日の危機を如何にかすべき。雲の如き英將猛卒も、敗衄の頽勢を如何にともする能はざる今の時、ジャンヌ何者なれば、斯くは神命を負うて此の不敵の言をなすか。言ひあはせねども、誰しも斯く思はざるはなかりき。されど苦しき時の神頼みは凡夫の常情、百方計盡きて望失せたる時は、甲斐なしと知りつゝも、萬一の僥倖を期して、人の助けを求むるは亦已み難き人情な

り。將軍ロベールもジャンヌの言を信ぜりとはあらねども、言はば物の試しにとて、言ふがまゝに一隊の兵を貸し與へて曰ひけらく、少女よ、行け。されど汝の身の上に何事の起るとも、予の知る所にあらず。

一千八百二十九年五月五日、ジャンヌは軍装して馬に跨り、將軍ロベールが貸し與へたる一隊の兵士を率ゐて、オルレアンを指して出て立ちぬ。シノンといへる村を過ぎて、當時此處に留りし國王シャルル七世に謁しぬ。王はジャンヌに其の名と用向とを問ひけるに、ジャンヌは、賢明なる王よ、わらはの名はジャンヌ、陛下の戴冠式をランにて行はんが爲に、神の送り給へる處女にて侍り」と答へぬ。ランは

歴代佛王の戴冠式を行ふ處なり。されど多年の戦亂の爲に、今や英軍の手中に在りて、シャルル七世は尙未だ是の大禮を擧ぐる能はざりしなり。

ジャンヌの評判は日を追うて遠近に傳はりぬ。或は狂と詆り、或は聖と稱へ、褒貶の聲一時に喧しかりき。されど、ドムレミーの一少女が佛國の救ひに起てりといふ事は、均しく國民の耳目を驚かせり。或僧侶嘗てジャンヌの信仰を試みしに、其の燃ゆるが如き熱誠に感激して、神の威靈の眞に其の身に宿れるを思ひぬとぞ。加ふるに、當時佛國に「佛蘭西は一女子に救はるゝ時あるべし」との流言久しき前より傳はりければ、その一女子こそジャンヌならめとの信

心、何時しか多數國民の胸中に起りぬ。さるにてもジャンヌは如何にしてオルレアン城の圍を解かんとするか。是萬人の均しく危み且憂へし所なり。

ジャンヌの小軍隊は、當時英佛兩軍の規律無きに比して、實に驚くべき整齊と純潔とを保ちたりき。其の先鋒には常に僧侶あり。嚙唳たる音楽に連れて壯快悲痛なる讃歌を誦し、ジャンヌの統率せる中軍は肅々として其の後に繼ぐ。ジャンヌは白馬に跨り、長劍を横たへ、銀甲の燦爛たるを着け、威風四邊を拂うてぞ見えにける。部下の兵士は何れも、先には輕侮の念を抱きしが、何時しか敬仰の情に打たれ、此の一少女の爲に、喜んで身命を抛たんと誓はざるは無

かりけり。

オルレアン城の攻撃は、實に目覺ましきものなりき。援軍の爲にとて來れる將士の中には、ジャンヌを戴くを好まざるもの少からざりしが、一たびジャンヌの働を見たる後は、何人も彼が非凡の威力を信ぜざるは無かりき。ジャンヌの戰場に立つや、手に指令旗を掲げたるのみ、未だ嘗て劍を抜きて人を斬りたる事あらず。常に揚言して曰く、吾はこれ神の大命によりて、此の國の危難を救はんが爲に此の世に出でたる者なり。吾が前には双も矢も其の力を失ふべし。これ我が體は此の世の物にて造られざればなり」と。斯くて彼の戦に臨むや、常に全軍に先だち、矢石亂飛の間

を馳騁し、叱咤督勵至らざる所なし。彼に従へる前列の兵士の敵丸に中りて、數十百人立地に仆るゝが中に、奇しき哉、ジャンヌは身に一矢を受けず、悠然として干戈の間に周旋する様は、眞に人業ならずぞ見えにける。

英軍が七ヶ月の間續けたるオルレアンの攻圍は、ジャンヌ十日にして之を驅逐せり。此の日ざましき勝利は固より部下將卒の奮闘に由ると雖も、是を統率し鼓舞したるジャンヌの力、其の主因たる事は掩ふべくもあらず。實に是驚くべき勝利なりき。當時佛國は國を擧げて英軍の蹂躪に委ね、一向屏息して其の鋒を避けん事を務めたり。オルレアン城中に圍まれたる佛の將士だに、ジャンヌの來援に

重きを置かず、此の攻圍にして更に一ヶ月を續けたらんに、何人も苦節を維持し得べしとは思はざりき。ジャンヌが一擧して得たる此の勝利は、敵も身方も奇蹟の如く驚けり。是に於てジャンヌの名は驚駭と恐怖とを以て喧傳せられ、一時絶望の淵に沈みたる佛軍の士氣は、打萎れたる草木に春雨の濺げるが如く、忽ち一道希望の光に打たれ、猛然として振ひ起れり。凡そ百年の間向ふ所敵無かりし英軍も、是より後、勢頓に挫け、さながら魍魎の日光に消ゆるが如く、漸く國外に退去しぬ。七月の中頃、シャルル七世は、凱歌歡呼の中にジャンヌを伴なひてランに入り、盛んなる戴冠式を行ひぬ。ジャンヌが天より受けし使命は、その言の如

くこゝに全うせらるるを得たり。

(高山樗牛)

*名は林次郎
美學者
評論家
明治三十五年歿

八 女流俳人

女流の俳人は古來甚だ少い。芭蕉の時代には乙州の母の智月尼、去來の妹のちね、凡兆の妻の羽紅など、七部集の中にもその句が見えて居るし、伊勢の園女や、加賀の千代女や、江戸の秋色女などは、逸話などを以てその名が著れて居る。これ等の女流を一作家として見ると、さして秀でた人はないやうであるが、女は女だけに感情の調子が柔くて潤がある。それが枯木に時雨の音をきくやうな閑寂な趣味を貴んだ昔の俳句の中にあつて、殊更珍しく、寒椿の一二輪を見

るやうな氣がする。

女流の俳人には二つのタイプがある。一つのタイプは弱々しく繊細で、若くて佳い句を残して若くて死んで行く人である。ちねも三十にならずして死んだらしく、文政年間の花讚女も二十三で死んだ。他の一つは、夫に別れてから孤獨の心を俳句で慰めて、隱遁的に安住したり、又は髪を落して尼になつたりして、心持も男性に近く變つて來る。このタイプの人は皆長生をして居る。園女は七十四、智月尼も同齡、千代女は七十五、捨女は六十五、多代女は九十歳までも生きた。

*岡西惟中の妻
享保十一年歿

園女は伊勢の松坂の人で、晩年芭蕉がその家に立寄つた

時、白菊の目に立てて見る塵もなし。といつて賞讚した句で見ると、いかにも貞淑な清艶な婦人であるらしく思はれる。

寢どころへ扇にすゑし螢かな。

負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな。

元山は秋のとりつ
く色もなし 園女



園女筆蹟

かうした句も女らしい。芭蕉はこの時、園女亭で饗應を受けた膳の中の菌にあたつて、大阪に來てから發病して、遂に世を去つたのであつた。師を思ふことに厚かつた園女の悲嘆と悔恨が思ひやられる。その後、園女は江戸に出て深

川に住み、眼科醫を生業とした。又禪を學んで、智鏡尼と名を變へた。剃髪をした頭上に、わざと十本ばかりの髪の毛を残して置いたといふのでも、晩年には餘程逸脱して、女ばなれがしてしまつたやうである。

芭蕉の遺骸は大阪から川舟で、大津の乙州の家へ届けられた。法衣(芭蕉の好みとあつて、特に茶色の布を選んだ)を縫うたのが智月尼であつた。芭蕉は嘗て智月尼から記念の書を乞はれた時、六十に近き人に形見を乞はれていとかなし。我先に死ぬといふことにやと戯れながら書いて與へたといふ話もある。

山ざくら散るや小川の水車。

*其角の門人名は秋享保十年歿

雲のまの星見てゐるや時鳥。

智月尼の句には美しい繪畫がある。

*秋色は江戸照降町の菓子屋の娘であつた。十三の時、上野の花見に来て、井戸端の櫻あふなし酒の酔といふ句を詠



蹟筆女色秋

んで、俄に名高くなつた。その對象になつたといふ櫻は、今も清水堂の裏手に秋色櫻として残つて居る。

底白にべにはきのこす躑躅かな。
すずしさや日の落ちかゝる海の上。

*元祿十一年歿

などが、この人として佳い句といふべきであらう。

*捨女は丹波柏原かいばらの人で、六歳の時に「雪の朝二の字二の字の下駄のあと」といふ句を詠んだといふほどだが、その作風は

うきことになれて雪間の嫁菜かな。

といふ風で、女らしくはあるが、句としては感服が出来ない。

この人も剃髪して播州の網干おぼしに庵を結んで長生した。

凡兆の妻の羽紅は

霜やけの手をふいてやる雪まろげ。

縫物や着もせてよごす五月雨。

などで見ると、良妻賢母らしい。

當時の女流俳家としては、何としても加賀の千代が傑出して居る。千代の句には、女らしい優しさが生きて居る。

人蝶々や何をゆめみて羽づかひ。

とほし灯の用意や雛の臺所。

夕顔やもののかくれて美しき。

かういふ句には、どうしても男には詠まれない女性獨得の境涯がある。しかしこの優しい感情が、動もすると女らしい小心や、女らしい注意となる。

白菊や紅さいた手のおそろしき。

根をつけしをなごの慾や葦草。

それが又神経質すぎる思ひやりともなる。

朝顔につるべとられてもらひ水。
これは千代の名とともに普く知られて居る句であるが、
うも優し過ぎて、この優しい氣持を見て下さいといふやう
な誇張の見えるのが厭味である。

百なりやつる一筋
の心より ちよ



千代女筆蹟

千代は松任*一の産で、幼少の時から句を好んだ。支考*三の門
人盧元坊*三といふ者が松任に來た時、千代はその旅宿を訪う
て、始めて教を乞うた。その時、時鳥といふ題で苦吟して夜
を徹した後、

石川縣石川郡
姓は各務 俳人
芭蕉十哲の一
享保十六年歿
年六十五
延享四年歿

時鳥時鳥とて明けにけり。
と作つて、その才を認められたといふ話もある。子を亡く
した時、

蜻蛉釣けふはどこまで行つたやら。

破る子のなくて障子の寒さかな。

剃髪して妙林尼と號した時、

髪を結ふ手の隙あけて火燧かな。

これ等はいづれも人口に膾炙して居る。作者の實感が、殊
に人情味が強く出て居るところが人を引付ける。しかし、
その人情味がその句を通俗化させて居る所以でもある。
女流の俳人で最も多く佳い作を遺した人としては、私は

*陸奥國白石の人
松窓と號す
文政六年歿

寧ろ後代の多代女を擧げたい。
多代女は岩代國須賀川の入市原氏である。三十一の時
婿を失つてから乙二の門に俳諧を學び、晩年江戸に出て諸
俳家と交つた。

空にみち空にきゆるや御忌の鐘

根に雪のはきためてある椿かな

行くも來るもみな春風の堤かな

有明の野ずゑに白し春の水

句風が一體に客觀的で、引きしまつて居て危げがない。こ
れほどしつかりした句を作つた人は、嘗て女流にはない。
しかしそれだけ女らしいところは少しもない。

生きすぎて我も寒いぞ冬の蠅

彼の女は九十歳まで生き、生前に自分の句集も出して、慶應
元年に死んだ。
(萩原井泉水)

九 琴

打見れば十三の絃、絃は皆

ひと色にして黄金の水脈とこそ見れ、

天の河とわたる雁のひとつらね、

しら羽かはす白玉の琴柱なびけり。

春の日を薔薇のかをり、丁子の香

衣にしめたる姫あつて、來て琴ひけば、
打對ひ、月のさし櫛、星の珠、
挿頭かざしにしたる姫ありて俱に歌ひぬ。

わが琴のおもしろきかな、自ら
まらうど達の珍しきゆし手清すが搔かき

ひねもすに身は聞き惚れて、琴の前、
琴爪はめし我が指を更に思はず、

(與謝野鐵幹)

*
名は寛
詩人

*
菅原道真が左遷の
途中の詠詩中の句

一〇 四時の變遷

「二榮一落これ春秋」と云ひけん。暑往き寒來るは天の道

なり。壯なる者は老い、盛なるものは衰ふ。人の身の上も
また陰陽消長の理には洩れず。女子一生の經歷、殊に四時
の變遷に似たるを感ずるなり。

春は天地の少女なり。少女は人生の春なり。東風そよ
そよと吹くまゝに結びし氷とけて、谷水の潺湲たる聲を發
して流るゝは、みどりごの搖籃の中に始めて日の光を仰ぎ、
呱呱たる聲を放ちて乳を求むるに喩ふべし。燒野の上に
萌えそめたる蕨の纖柔なるは、みどりごの手足の纖柔なる
に彷彿たり。やがて咲出づる花の色は、をとめごのほへ
る俤をうつし、枝より枝にとびかひて囀る鶯の聲は、をとめ
ごの謠ふ節にかたどれり。されば人々白たへの袖ふりは

晋の陶淵明の語

へて、野に山に春の景色を尋ねて、ひねもす打興ずるが如く、少女の可憐にして、やうくおよずくるを見ては、世の辛苦にやつれし父母もなぐさめられて、心おのづから長閑なるべし。げに春は樂しき時候なり、少年は樂しき時代なり。されど徒に花鳥にうかされて、田の面をすきかへしつゝ、種子を下すことを怠りなば、秋の收穫は得られざらん。盛年は重ねて來らず、時に及びて勉強せずして、老いて臍を嚙むとも、また及ぶべしやは。

春去りて夏となりぬれば、木々の花散りはてて、梢には緑の葉のみぞ繁かりける。をとめごの、年長じては友禪の振袖をぬぎかへてよそほひ、復はてなるを旨とせず。此の際

揚子は岐路を見て
歎き、墨子は白練
絲を見て泣いた故
事

蜻蛉釣り今日は何
處までいったやら
千代

に及びては、父母の膝下にのみはあらず。さまざまの人に交るにつれ、世の弊風にそみ易きこと、花散りし梢に毛蟲のつき易きが如くなれば、深く慎みて、白絲岐路のなげきを免るべきなり。かくて年ますく長じて、人の家に嫁すれば、姑につかへ、夫につかへ、小姑にまじはり、奴婢を使ふなど、身のつとめいやますにつれて、心の苦しみやましにますは、なほ夏深くなるにつれ、暑さはげしく、蚤・蚊など多くなりて、安らかに眠ることを得ざるが如く、春のたのしきにひきかへて、心苦しきこといふべうもあらず。時には恨を子規に寄せて、血を吐く思もあるべく、時にはまた歎を蜻蛉釣りによそへて、歸らぬ人の行方を悲しむ涙もあるべし。

* 秋の初になりぬれば今年も半ばは過ぎにけり我がよふけゆく月影の傾く見るこそ悲しけれ 僧慈圓

* 秋の初になりぬれば、今年も半ば過ぎしなり。わがよふけゆく月影は、いとど哀を添ふれども、暑さ消えて、朝夕の風すずしく、起居いとやすくなりぬるは、女の身のあまたの苦しみをなめて、人の心の頼み難きをさと、巧みに世に處する法を覚えて、また苦しとも思はざるに似たり。やがて西ふく風身にしみて、蟲の聲々あはれなるも、しかすがに七草の花、春の花にもまして、一種可憐の趣あり。女の身も亦色香や、失せぬれど、禮節にならひて、萬まめやかなる風姿は、少女にもまさりて尊きを覺ゆるなり。かくて五穀果實など全く熟したれば、收穫終りて、百姓ども皆太平樂を謠ひ、和氣洋洋として鎮守の森に溢るゝは、玉の如き男子、花の如き

娘ども、やすらかに生みて、一家團欒の中に、無量の快樂自ら生ずるが如く、心にかゝる浮雲晴れて、願望の月いとどまどかなるべし。

秋往いて冬の初になれば、小春日和うるはしく、長閑なること春にも劣らず、鳥の聲々滑らかにして、立田川邊に錦流るる有様は、年老いて世累なくなり、數多の子ども皆膝のほとりに集りて、反哺の孝を盡くすによりて、老母の心の閑かにして、楽しくなりたるにも譬へつべし。科戸の風はげしく吹きまざるまゝに、木の葉ちりはてて、満園皆枯木となりて、いとどさびしくなりぬるは、齒落ち、目くぼみ、腰は梓の弓と曲り、額の皺は齡の數と共に添ひ、形容枯槁して、見る影も

* 大和國生駒川の下流

なくなれる人の身の上に異ならず。かくて寒さいよいよつ
 つのり、山川草木悉く白雪の中に埋れて、二年空しくこゝに
 終る。人の齡もまた愈、加はり、白髪雪と相映じて、いとどす
 さまじく、遂に無常の風にさそはれて、一命窮陰と共に空し
 くなりぬべし。觀ずれば四時自然の理、春あれば秋あり、人
 間必須の勢、生あればまた死なきを得ず。迷へば南山の齡
 も短く、悟れば蜉蝣の一期も長し。人生夢と見るも、はた眞
 と見るも、一に人の心の如何にあり。天地自然の變遷を解
 するものにして、始めて共に人生の事を語るべきなり。

* (天町桂月)

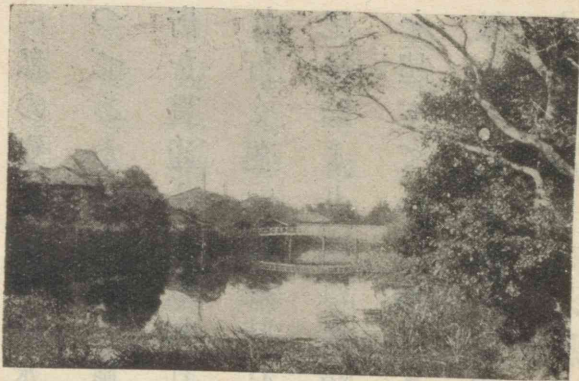
* 南山は終南山を云ふ。長壽を祝する意。

* 文學士
 國文學者
 文學士
 大正十四年歿

一一 水 郷 (一)

私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廢市の一
 つである。自然の風物は如何にも南國的である。柳河の
 街を貫通する數知れぬ溝渠ほりの緩やかな流には、日にく廢
 れ行く舊い封建時代の白壁が、今なほ懐かしい影を映す。
 肥後路より、或は久留米路より、或は佐賀路より筑後川の流
 を超えて、わが街に入り來る旅人は、其の周圍の大平野に分
 岐して、遠く近く、瓏銀の光を放つてゐる幾多の河水を眼に
 するであらう。さうして歩むにつれて、其の水面の隨所に、
 菱の葉、蓮、眞菰、河骨、或は赤褐、黄緑、其の他様々の浮藻の強烈

な更紗模様の中に、微かに淡紫のウオターヒヤシンスの花



(一) 柳河風景

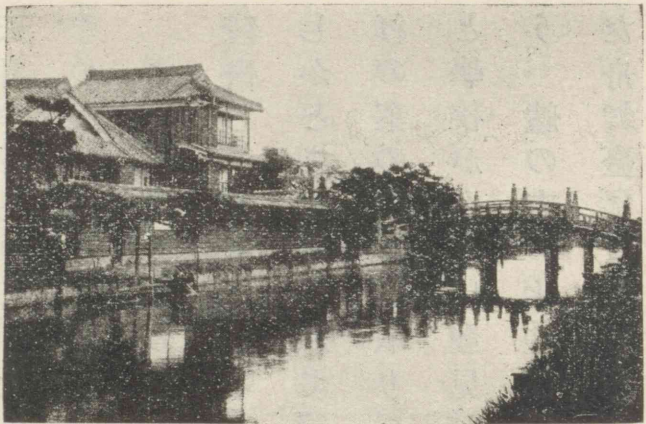
を見出すであらう。水は清らかに流れて廢市に入り、廢れはてた料理屋の人も無き厨の下を流れ、洗濯女の白い晒布に注ぎ、水門に堰かれては、酒造る水となり、汲水場に立つ湯上りの素肌しなやかな病娘の唇を嗽ぎ、氣の弱い鶯の毛に擾され、さうして夜は觀音講のなつかしい提燈の灯をちらつかせながら、樋を隔てて海近き沖の端の鹹川に落ちて行く、静かな幾多の溝渠は、かうして昔のまゝの白

壁に寂しく光り、たま／＼芝居見の水路となり、蛇を奔らせ、變化多き少年の祕密を育む。水郷柳河は、さながら水に浮いた灰色の樞である。

折々の季節につれて、四邊の風物も改まる。短い冬の間に見る影も無く汚れ果てた田や畑に、刈株のみが鋤きかへされたまゝ、色も無く乾き盡くし、羽に白い斑紋を持つた怪しげな高麗烏(鶺鴒)のみが、廢れた寺院の屋根に鳴き叫ぶ。さうして青い股引をつけた櫛の實採りの男が、静かに暮れて行く卵色の梢を眺めては、無言に手を動かしてゐる外には、展望の曠い平野だけに、何らの見るべき變化も無く、凡てが

陰鬱な光に被はれる。柳河の街の子供は、かういふ時、幽かなシユブタ(方言、鮠の一種をいふ)の腹の閃きにも、話に聞く生膽取の青い眼つきを思ひ出し、海邊の黒猫は、ほけ果てた白い穂の限りも無く戦いでゐる枯草原の中に、ちつと蹲つたまま、過ぎ行く冬の瞬きに、晝もなほ耳かたむけて死ぬるであらう。

いづれにもまして、春の季節の長いといふ事は、また此の地方を限りも無く悲しいものに思はせる。麥が伸び、見渡す限りの平野に、黄色い花の毛氈が柔かな軟風に薫り初める頃、まだ見ぬ幸を求むる爲に、うらわかい町の娘の一群は、



(二) 柳川風景

笈摺に身をやつし、哀な巡禮の姿となつて、始めて西國三十三番の札所を旅して歩く。其の留守の間にも、水車は長閑に廻り、町端れの飾屋の爺は、大きな鼈甲縁の眼鏡をかけて、怪しい金象眼の仕事にチンカチと鎚を鳴らし、黄色い支那服の商人は、生温い挨拶の言葉をかけて、戸毎に覗き初める。春も半ばとなつて、菜の花も散りかゝる頃には、街道の所々に、木蠟をならして干す畑が蒼白く光り、さうして狐つきの

女がたわいも無く狂ひ出し、野の隅には粗末な蓆張りの圓天井が作られる。その芝居小屋の陰を行く馬車の喇叭のなつかしさよ。

さはいへ、大麥の花が咲き、菜種の花も實となる晩春の名残惜しさは、青くさい芥子の萼や、新らしい蠶豆の香に、いつしかとまたまぎれて行く。○まだ夏には早い五月の水路に、杉の葉の飾りを取りつけ初めた大きな三神丸の一部を、ふと學校がへりに發見した沖*の端の子供の喜は、何に譬へよう。 艦の方の化粧部屋は、蓆で張られ、昔ながらの廢れかけた舟舞臺には、櫻の造花を隈無くかざし、欄干の三方に垂らした御簾は、彩色も褪せはてたものではあるが、水天宮の祭

* 柳河町の南方の漁村

日となれば、粹な紺はつの半被づの若い衆に棹さゝれて、暮あひには笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替へる度に幕をかへ、日をかへる度に、歌舞伎の藝題もとりかへて、同じ水路を上下すること三日三夜、見物も皆あちらこちらの溝渠から小舟に棹さして集り、華やかに水郷の歡を盡くして別れるものの、何處かに頽廢の趣が見えて、祭の濟んだあとから、夏の哀れは日にく深くなる。 此の騒ぎが静まれば、柳河には、またゆかしい螢の時季が来る。

あの眼の光るは
星か螢か鶉の鳥か、

螢ならばお手に取る、

お星様なら拜ませう……

穉い時、私はよくかういふ子守唄を聞かされた。さうして恐ろしい夜の闇におびえながら、乳母の背中から手を出して、例の首の赤い螢を握りしめた時、私はどんなに好奇の心に顫へたであらう。實際、螢は地方の名物である。馬鈴薯の花咲くころ、街の小舟はまた幾つとなく矢部川の流を溯り始める。さうして甘酸ばい燐光の息する度に、青々と眼に沁みる螢籠に、美しい假寢の夢を時たまに閃かしながら、水のまにまに夜をこめて流れ下るのを習慣とするのである。

一二 水 郷 (二)

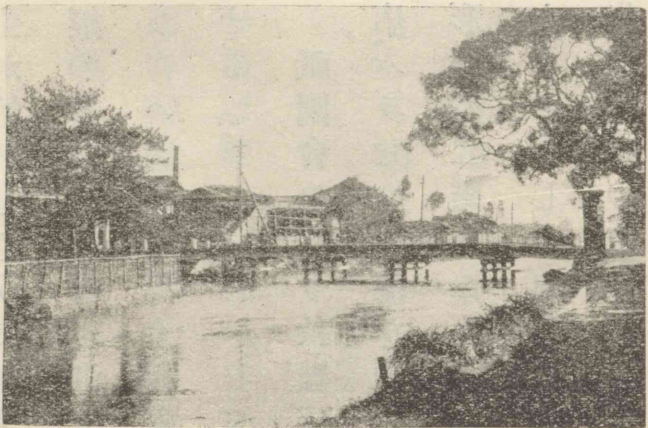
長い霖雨の間に、果實の樹は重くしなだれ、ものの卵はねばねばと溜水のむじな藻にからみつき、蛇は木にのぼり、眞菰は繁りに繁る。柳河の夏は斯うして凡ての心を重く暗く腐らしたあと、池の邊に鬼百合の赤い閃きを先だてて、焼くが如き暑熱を注ぎかける。

日光の直射を恐れて、羽蟻は飛びめぐり、溝渠は水涸れて悪臭を放ち、病犬は朝鮮薊の紫の刺に後退りつゝ、吠え廻り、蛙は蒼白い腹を仰向けて死に、泥臭い鮎の頭は、苦しさに泡を立て始める。七八月の炎熱は、かうして平原の到ると

ころの街々に、激しい流行病を仲介し、日毎に夕焼の赤い反照を浴びせかけるのである。

この時、海に最も近い沖の端の漁師原には、男も女も半裸體のまま、紅い西瓜を貪り、石炭酸の強い異臭の中に晝は寢ね、夜は病魔退散のまじなひととして、廢れた街の中、或は堀の柳の蔭に縁臺（スチ）を持ち出しては、盛んに花火を揚げる。さうして朽ちかゝつた家々のランプの陰から、死に瀕した虎列刺患者は、恐ろしさうに蒲團を匍出し、ただちつと薄あかりの中に色變へて行く五色花火のしたゝりに、疲れた瞳を集める。

焼酎の不攝生に、人々の胃を害ふも此の時である。 犬殺



(三) 柳 河 風 景

しが歩き、巫女が酒倉に見えるのも、此の時である。さうして雨乞の思ひくゞに白粉をつけ、紅い隈どりを凝らした假裝行列の、日にくゞ幾隊となく續いて行くのも、此の時である。さはいへ、また久留米餅をつけ、新らしい手籠を擁へた菱の實賣りの娘の、なつかしい「菱シヤンチウ」の呼聲を聞くのも、この時である。

九月に入つて、登記所の庭に黄色い鶏頭の花が咲くやう

になつても、まだ虎列刺は止む氣色もない。若い町の辯護士が忙がしさに粗末な硝子戸を出入し、蒼白い藥種屋の娘のあはれな噂が漸く人の口に上るやうになれば、秋はもう青い澁柿を搗く杵の音にも、新らしい匂の爽かさを忍ばせる。

祇園會が終り秋も更けて、線香を乾かす家、菜種油を搾る店、パラピン蠟燭を造る娘、提燈の繪を描く義太夫の師匠、飴形屋の二階にひとり取殘された旅役者の女房、すべてがしんみりとした氣分に物のあはれを思ひ知る十月の末には、先づ秋祭の準備として、一旦水門の扉は閉され、水は干され、柳河のあらゆる溝渠は、あらゆる市民の手に依つて、魚は掬

はれ、腥い水草は取除かれ、溝泥は浚へ盡くされる。此の「水落ち」の楽しさは、町の子供の何にも代へ難い季節の華である。さうしてこの一騒ぎのあと、また久澗ぶりに清らかな水が廢市に注ぎ入り、楽しい祭の前觸が、異様な道化の服裝をして喇叭を鳴らし、拍子木を打ちつゝ、明日の芝居の藝題を面白をかしく披露しながら、町から町へと巡り歩く。

祭は町から町へ、日を異にして準備される。さうして此の家庭を擧げて往來しては、一夕の愉快なる團欒に、美しい懇親の情を交すのである。加之、識る人も識らぬ人も、酔うては無禮講の風俗をかしく、朱欒の實の蔭に、幼兒と獨樂を廻はし、戸ごとに酒をたづねては浮かれ歩く。祭のあと

の寂しさはまた格別である。野は火のやうな楡紅葉に、百舌鳥がただ啼きしきるばかり。何處からともなく漂泊して來た傀儡師の肩の上に、生白い女の首がカツクカツクと眉を振る物凄さも、何時の間にか人々の記憶から搔消されるやうに消え失せて、寂しい冬が來る。
(北原白秋)

一三一 一羽の雀

門の際に銀杏樹が一本、それにつづいて竹が六七本群れて立つてゐる。銀杏樹は此の間まで眞黄な葉を夕日にきらめかせてゐたが、もうそれもすつかり散り盡くして、今は裸になつた無細工な枝を、冷たい空氣の中に伸ばしてゐる。

竹の葉もぢつとして動かずに、寒さが、葉をひたし幹に喰ひ入つて行くのを、如何様とも手の付けやうがなく、ただ立ちすくんでゐる。日は野末に遠く没して、餘光が空を紅く燃やし、銅色に次第に黒くなつて來る空の上にも、微かに反射を見せてゐるが、銀杏樹の梢にも竹の葉にも、もうその靜かな光の先は及ばない。竹の茂みの眞中から、次第に闇の色が四方へ廣がり漂つて行くやうで、此處の處が暗さの中心であるやうに思はれる。

私は、この風も暫し死んだ夕方の、魔術でもかけられたやうな靜かさを眺めて窓の所に立つてゐた。コツ／＼と人の足音が塀の外の小石道に聞えて來て、門

の近くへ寄つたかと思ふと、ばさ〜と、今まで靜かにしてゐた竹の葉の黒みが破れて、何か小さな黒いものが竹の上の方へ舞ひ上つた。その途端に、カラツと門の戸が開いて、用聞きらしい者が、ずん〜家の裏の方へ廻つて行つた。

私は氣をとめて見た。見ると一羽の雀だ。ばさ〜羽搏きしながら、目がよく見えないので、足どまりも危く、幾度か落ちさうにして、其の都度羽を搏く。チア〜と悲しうな聲を擧げる。が、それかといつて、竹の茂みから他所へ飛び去らうとはしない。チアチアまた鳴いてゐる。——今家の裏へ廻つて行つた用聞きがまた出て來た。雀は一層羽搏きを大きくして、銀杏の梢へ高く舞ひ上つた。用聞き

は怪訝な様子をして一寸上を見上げたが、またびたりと門を閉ぢて出て行つてしまつた。

もう何方を見ても闇が一面に立ちかくして、雀は飛んで行くべき方もない。小頸を傾け、身を縮めて、小さな鳥は銀杏樹の梢にとまつてゐた。私は鳥がどうする事かと、物好きに窓を去らず、ガラスの中から覗いてゐた。寒い空氣は一層寒さを増して、重苦しく、四方からその重みで、此の一羽の小鳥を押し付けて來るやうな氣がする。寒さと暗さで、此の鳥は動けなくなつたのではあるまいか。翌朝になつて見たらば、門の際に、小さな鳥の死骸が、白い眼を閉いで落ちてゐるのではあるまいか……

不意にチア、チアと二聲ばかり鳴いたかと思ふと、ばさばさつと羽搏きして小さな影は、銀杏樹の梢から下へ落ちた。何處へ落ちるかを見ると、毎晩慣れてゐたと見えて、二三度羽搏きをしてゐる中に、其の姿は竹の茂みの中へ隠れて、暫くすると、竹の葉の破るゝ騒ぎも、雀の羽音も、鳴き聲も何もなくなつて、もう眞のまつくら闇になつてしまつた。今まで氣が付かずに居たが、此の一羽の雀は、毎晩此の竹叢へ來て、此處を宿りとしてゐるに違ひない。此の竹叢を取圍んでゐる無限の闇は、一羽の雀を押潰すやうに四方から寄せて來るのだが、繊弱い竹の葉がその闇の力を押し返し、鋭い寒さの射し通して來るのを防いで、穩かな一夜の眠りを此

の雀に與へてゐるのだ。

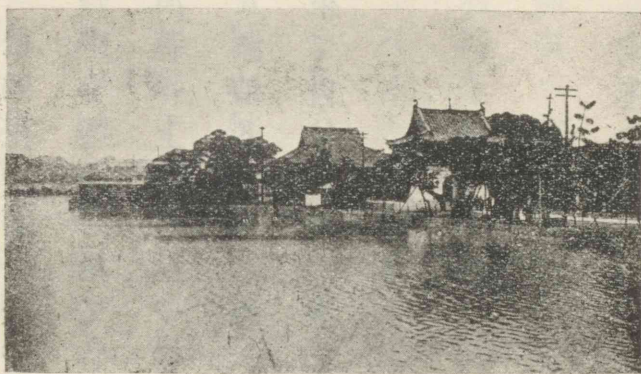
私は机の前に坐つたが、まだランプを點けず、そのまゝ闇の中を透かし見て、竹叢の中に宿りをとつてゐる小さな漂浪者の上を思ひやつてゐた。漂浪者だ、唯一羽ぎりの小さな漂浪者だ。と思ふと、私は急に物寂しいやうな氣がして來て、自分の身の上を思ひやらずには居られなかつた。

*
名は喬松
早稻田大學教授

(吉江孤雁)

一四 幻影

或冬の日の夕方、私は、上野の臺から、不忍池畔へ下つたところがある。夕映の空を紅にぼかして、向陵一帶の丘陵の森



渡つて辨天の社の裏へ出て、私は百日紅の枯木へ身を倚せ

落ちてゐた。丘の上遠く、富士の姿が黒く鮮かに紅の中に立つてゐた。我一步臺を下ると、富士は少し見えなくななり、一步又一步、次第に隠れて、遂に其の姿は森影の後方に没してしまふ。池の中には枯蓮の葉が浮いてゐて、鴨が四五羽氷りついたやうに、ぢつとしてゐるばかり、常は多い散歩の人の影も見えない。橋を

掛け、凝然と水面を見詰めてゐた。池を繞つて汽笛の音、車馬の響、夕方のとよみは、一つと成つて聞えて来る。

ふと、今まで聞えて居た汽笛の音も、車馬の響も、聞えず成つて、前面の丘陵が遠く開け、池の水が廣がり、蘆が茂つて、天の紅が上から覆ひかゝるやうにして、人一人無い曠野の姿が眼前に浮かんで来た。そして我一人其の野の中に行き暮れて、寂しい思ひをしてゐるやうな氣がしてゐると、不意に水鳥の羽搏きがして、幻影は消えてしまつた。汽笛の響は復耳に入り、煙突からは前のやうに煙を靡かせてゐる。池も以前の狭い池で、枯蓮が寒げに浮いてゐるばかり。私は池を廻つて家へ歸る途々、西の空の紅の次第に褪せ行く

のを見ながら、不思議な感に打たれてゐた。

此等の幻影をば、人は呼んで空想だとか神經の作用だとか、言ふかも知れないが、私には、自然の力が人の胸中に忍び入つて、ふとした折に、其の場所の過去の姿、また未來の様をば、眼前に浮かばせるとより外は思はれない。私はいまだにさう信じてゐる。

(吉江孤雁)

一五 尊皇の精神

我が國民が皇室に對して厚い忠誠の念を持つてゐることとは、上古以來少しも變らぬ。武家時代、大權の下に移つたのを見て、全く尊皇心が無くなつた時代と思ふのは皮相の

見に過ぎぬ。外人などは往々さういふことを言ふ。これは自分等の國柄から考へるからである。權臣が寵恩に慣れて專横な政をしたり、將軍が兵馬の權を握つたりした事實は、國史の上では勿論面白くない現象に相違ない。併し其の間は頼三樹三郎が歌つたやうに「天邊大月缺、光明」の時代で、言はば浮雲が天日を蔽うたのである。決して本來の日が無くなつたのではない、天下の人は皆天日の空にあることを知つて居つたのである。兵馬の權を掌握した公方様でも、やはり天皇の臣下で、天皇から爵位を戴いて居ることを知つて居つた、天皇の御代理として國民の上に立つて居ると信じて居つたのである。天皇が政治からお離れに

なつても、天皇の御威光は少しも衰へては居らぬ、却つて益々神聖なものと見上げて、愈々神と同様に尊崇するやうになつた。公方様を見ても何とも思はぬが、九重雲深くまします禁裏様を拜めば目が潰れると信じて居つた。藤原氏の攝政關白時代でも同様で、幼冲の天子を擁立し奉りて攝關が政權を恣にしても、皇室の尊嚴なることは少しも變らぬ。攝關時代も、武家時代も、そこに何等の差別は無い。攝政や、關白や、將軍や、彼等自身も亦政權を握つては居るが、皇室を尊敬し奉るの念を失はず、朝廷の恩寵を笠に着て、下に號令したのである。西洋人は國史を見ても其の皮相を見るのみであるから、武家時代は國民が全く朝廷を忘れた時代か

と早合點する。久しく日本に居て日本文學に通曉して居るチャンブレン氏でさへ、やはりさう信じて居る。それで徳川以來起つて來た水戸の尊皇論、國學者の愛國論を以て、一旦廢れたものの復興のやうに考へ、今の教育は全くミカド崇拜を教へる爲に、爲政者が工夫したもののやうに論じて居る。焉んぞ知らん、我が尊皇心は、攝關時代も、武家時代も、一貫して國民の間に磅礴して居つた事を。そは藤田東湖の正氣の歌に、

神州誰君臨。萬古仰天皇。皇風洽六合。

明德伴太陽。不世無汚隆。正氣時放光。

といつた通り、歴代時々あらはれて居る。民主的王國たる

英國の國民には、どうしても日本の尊皇心は了解が出来かねるのである。

我が國文學を見れば常にこの精神が發揮せられて居る。見よ見よ、上代の祝詞は祭祀の文學にして、即ちマツリゴトの詞である。柿本人麿の長歌は更に之を抒情歌に應用して、奈良時代の雄大な長歌を成し得たもので、常に神代より説起し、山川より仕ふる大君と歌つたのである。和歌を基礎として起つた平安時代の物語日記は、つまり朝廷のみやびを寫し、其の儀禮を記載したものである。紫式部にしても、清少納言にしても、低い身柄でありながら、身は月卿雲客と伍して至尊に近く侍つた名譽を筆述したのである。是

*持統天皇の吉野宮
に行幸の時柿本の
人麿の作れる長歌
の一節に「山川も
よりて仕ふる神の
御代かも」

を無上のほまれと思惟して宮中の見聞を記載したのである。然るべき人の女などは禁中に宮仕されるがよいといひ、宮中の御模様を見ては常に有難涙のこぼれることを敍して居る。枕草子は全部が其の時代の懷舊談である。これ等の書物の讀者も亦、之によつて宮中の模様を餘所ながら覗ひ知ることを喜んで、面白く讀んだのである。延喜時代には和歌の勅撰集が始まつて爾來、歌人は勅撰集に其の詠の入るのを無上の名譽と感じた。歌と朝廷とは茲に全然離るべからざるものとなつた。太古から存在して、形式も言語も純日本である所が、皇室と同じである。敷島の道と稱し、葦原の道の名のあつたのも是が爲である。近世の懐

慨家に歌人が多く、歌人が常に尊皇家であつた理由も、これ
で理解せられる。平家物語などの軍記物語、その一轉し
て劇化せられた謠曲の類が常に神祇を尊び、皇室を崇める
ことはいふまでも無い。

概して厭世主義のはびこつたといふ鎌倉・吉野時代の文
學にも尊皇の思想は絶えず繰返されて居る。

*徒然草の一節

御門の御位はいとも畏し、竹の園生の末葉まで人間の種
ならぬぞやんごとなき。

*徒然草の一節

衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様
こそ世づかずめでたきものなれ。

などといつてある。かく朝廷を崇める思想が即ち有職故

*徒然草中の話

實の學問の起つた所以である。「何事も古き世のみぞ慕は
しき」と云ふので、平安朝の典雅なみやびをしのぶ當時の時
代精神を成し、随つて所謂擬古の文體までも起つたのであ
る。擬古文は徳川時代の國學者が作り始めたのでなく、已
に鎌倉時代に起つて居る。徳川時代の戯曲・小説は多く武
士道を主として居るので、朝廷を歌はないが、直接に朝廷を
おとしたものは一つとして無い。況や徳川時代には國學
者の歌文に於ても、漢學者の詩文に於ても、尊皇を歌つたも
のは時代の切迫と共に益多くなつて來た。之を要するに、
太古から今日まで、何時の世如何なる文學を見ても、皇室に
對して不平がましい言は半句として無い。國民が朝廷を

忘れたやうに見える時代はあつても、決して忘れたのではない、衷心からの尊敬心は毫も渝らなかつた。此の國土は即ち皇室と共に存在する。諸冊の兩尊國土を産ませられて、次ぎに天照大神を生ませられたといふ上代思想は、嚴として遣つて居るのである。

西洋では王室と國土との關係が密接で無い。外國の王族は二三百年の昔に遡れば、地方の豪族位なのが多い。それ故祖國を護れといふ事を教へる。且大抵の國歌は、國民の自由を歌ひ、國家の繁榮を歌ふ事が主になつて居る。米國のはもとより、英吉利のルール、ブリタニヤでも、佛蘭西のマルセーユでも皆それである。よし國王を歌ふにしても、

神よ國王に幸あれと、國王以外にゴツドを考へてゐる。我が國の君が代は唯簡單に御代長久を祝してある、それが即ち國歌である。皇室の繁榮は即ち國家の繁茂である、而して又臣民の繁榮である。之を區別して歌ふ必要はない。諸外國は最初から皇室と國土とが離れて居る國風である。政體が幾變遷し、主權者が幾たび新たにならうとも、國家は依然として存續するであらう。之に反して、我が日本は皇室と國土は切つても切られぬやうに結付いて居る。皇室の御繁榮は即ち國家の繁榮であることを知ると同時に、皇室なくして日本國もなく、日本人も存在し得られぬといふことを深く念はねばならぬ。

(芳賀矢一)

一六 正直であれ

「正直であれ」とは、誰もいふ言葉である。自己に正直であれといふことも可なり、言ひ古された言葉である。正直であることは、即ち自分の魂を生かして行く唯一つの正しい道である。

正直であることには非常な勇氣を必要とすることも覺悟しなければならぬ。私達は自己に正直である爲に、多くの敵を持つことを恐れてはならぬ。人に憎まれることを恐れてはならぬ。堂々の戦を恐れてはならぬ。心の弱いといふことは、時として一種の罪惡となる。正

しいことの爲に戦ふことの出来ない臆病者は自分の魂を救ふ機會を失ふ。

しかし、考へなければならぬことがある。自己に正直であれといふことは、自分の胸に思つたことを言つてしまへといふことではない。

私は時々「自己に對して正直であれ」といふことを穿き違へた人々の不快な言葉を聽くことがある。自己に對して正直であると同時に、私達は他人に對する正直を忘れてはならぬ。自己に正直であることは、自己の魂に對する親切心である。私達は自己の魂に對すると同じ強さの親切心を、他人の魂に對しても持つてゐなければならぬ。

謙虚な自分の魂に對して恥づることのない言葉のみが、自己に正直な言葉である、純一な素樸な魂そのもののさゝやきである。人の悲しみに對して、人の苦痛に對して、そゝがれる涙こそ最も自己に正直な言葉である。

正直な言葉は一時は相手の感情を傷ふことがあるかも知れぬが、必ず相手の魂を生かす。相手の魂を生かさないやうな言葉は決して正直な言葉ではない。

正直な言葉は一つの概念ではない、また批評でもない。眞理が眞理が必ずしも正直な言葉であるとは言へない。眞理が一度人格を通して表れて來る時、それは正直な言葉となつて響いて來るのである。

たとへ眞理と雖も、濫い人格を通らないで來るものは、不正直な言葉となる。

「言ひたいことを言ふ」のが決して正直な言葉ではない。それは最も厭ふべき、憎むべき不正直な言葉である。言ひたいことと言はねばならぬこととは大分違ふ。

言ひたいことは、どのやうな臆病者も言ふ。言はねばならぬことは、勇氣ある人でなければ言へぬ。

匿名の手紙などを出して、言ひたいことを言ふのは、最も卑怯な人間のやり方である。面と對つて言はねばならぬことを言つたのは、キリストであり、佛陀であり、マアカス、アウレリウスであり、孔子である。

*
羅馬の帝王哲學者

言ひたいことを言つて、自分の責任を免れようとするくらゐ卑しい人間はない。彼等は人の魂を傷つけることを喜ぶ卑劣漢である。彼等の言葉は人の魂を傷つけると共に、自分自身の魂を亡ぼす。

言はなければならぬことを正直に語るものは、常に多くの敵を持ち、十字架を負はなければならぬ。しかし、その言葉は人を生かし、彼自身の魂を救ふ。

言はなければならぬことを言ふ人の言葉には、自責の念があり、涙があり、感謝があり、同労者の憐愍がある。私達は子を打つ親の眼に涙が泛んでゐることを忘れてはならぬ。鞭うたるゝものよりも、鞭うつものの苦痛の更に深く切

なることを知らなければならぬ。

鞭うつ者も泣け、鞭うたるゝものも泣け。泣いて共に祈る時、神の國の扉が開かれるであらう。

鞭うつものも祝福せられ、鞭うたるゝものも祝福せられてあれ。

正直な言葉はいつも愛から生れて来る筈である。憎から生れる言葉ほど不正直なものはない。(吉田絃二郎)

一七 故郷の花

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけん、侍五騎、童一人、わが身ともに、混甲七騎取つて返し、五條三位俊成卿の許

*平忠度
壽永三年一谷に戦
死した
*藤原俊成
元久元年薨

におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。忠度と名のり給へば、落人歸り來れり。とて門の内騒ぎ合へり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、自ら高らかに申されけるは、これは三位殿に申すべきことあつて忠度が参りて候。假令門はあけられずとも、この際まで立寄り給へ。申すべきことの候。と申されたりければ、俊成卿その人ならば苦しかるまじ、あけて入れ申せ。とて、門をあけて對面ありけり。事の體何となうものあはれなり。

薩摩守申されけるは、先年申し承つてより後は、ゆめく疎略を存ぜずとは申しながら、この二三箇年は京都の騒、國の亂出て來、剩へ當家の身の上に罷成りて候へば、常に參

り寄ること候はず。君既に京都を出てさせ給ひぬ。一門の運命今日は、はや盡きはて候。それにつき候ひては、撰集の御沙汰あるべき由承つて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らんと存じ候ひつるに、かゝる世の亂出て來てその沙汰なく候條、ただ一身の歎と存じ候。この後、世しづまつて撰集の御沙汰候はば、これに候卷物の中にさりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭にても嬉しと存じ候はば、遠き御守とこそなりまゐらせ候はんずれ。とて、日比詠み置かれたる歌どもの中に、秀歌とおほしきを百餘首書きあつめられたりける卷物を、今はとて打立たれける時、これを取つて持たれたりけるを、鑑の引合せ

より取出でて俊成卿に奉らる。

三位之を開きて見給ひて、かゝる忘形見どもを賜はり候上は、ゆめ〜疎略を存ずまじう候。さても只今の御渡りこそ情も深う哀も殊に勝れて、感涙抑へ難うこそ候へ。と宣へば、薩摩守屍を野山に曝さば曝せ、浮名を西海の波に流さば流せ、今は憂世に思ひおく事なし。さらば暇申して。とて馬に打乗り、兜の緒をしめて西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位後を遙に見送つて立たれたれば、忠度の聲と覺しくて、前途程遠し、思を雁山の夕べの雲に馳すと高らかに口ずさみ給へば、俊成卿いとど哀れに覺えて、涙を抑へて入り給ひぬ。その後、世静まりて千載集を撰ぜられけるに、忠度のあり

*前途程遠馳思
於雁山之暮雲、
後會期遙霧縷
於鴻臚之曉淚。

し有様いひおきし言の葉、今更思ひ出でてあはれなりけり。件の卷物のなかにさりぬべき歌いくらもありけれども、その身勅勘の人なれば名字をばあらはされず、故郷花といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、よみ人しらずと入れられたる。

さゝなみや志賀の都は荒れにしを、

むかしながらの山ざくらかな。

その身朝敵となりぬる上は子細に及ばずといひながら、うらめしかりしことどもなり。
(平家物語)

一八 少年

友一の六つの年は、幼児から更に少年らしい時期に移り行かうとする一轉機として、彼の小さい閱歷に——三つ違ひの弟との關係上、可なりお兄さん扱ひにされる場合がありながらも、要するにその弟より稍大きい赤ん坊としか見られなかつた過去の平凡な生活の上に、——著しい變化と様々な出來事や經驗を持ち來たしました。繪畫を書く事、繪本を見る事、お伽話を讀んで貰ふ事、玩弄物を並べる事、弟ときみ——彼等の忠實な嫁姆——と鬼子つこをして騒ぐ事、庭を駆け廻る事、ブランコや三輪車に乗る事、お天氣のいゝ日に電車道の方や、近所の墓地や、田圃へ散歩に伴なはれる事、その序に掘割の橋の傍にあるきみの實家の植木屋を訪問する事、弟との一寸した喧嘩、爭論、涙、和解、十時と三時との楽しみなお菓子——彼の今日までの生活はすべてこれ等の繰返しに過ぎません

でした。その他はたま／＼の外出、子供日の有樂座を見物するとか、動物園に連れて行つて貰ふとかを、その單調を破る唯一の變化として、何よりも嬉しい事に數へてゐたのでありますが、其の内に追々一人前の子供として、有ゆる欲望の擴がりかけた彼の心は何となく今までの事だけでは満足されない飽足りなさを感じかけて來ました。單なる家の内外の驅歩きや、母親と三つの弟ときみを相手の遊戯だけでは、到底洩らしきれない力の溢れがありました。彼はあてどもなく、何ものかを求めようとする目を見張りました。而して巢の縁から高い大空や、自由な森や、野の方を思ひやる小鳥の心持で外界を覗いて見た時、其處には自分の未だ立ち入るを許されなかつた様々の世界のある事を發見しました。中でも最も強く彼の心を引きつけたのは、路傍や、人の門や、又は掘割の

橋の上などにかたまり合つて、いつも愉快さうな會話をして騒いでゐる子供等の群でありました。殊にお稻荷様の横町と稱する、電車路から、友一の家のある郊外の静かな通りへ抜けようとする一筋の狭い路は、左右に植木の下駄人や、工場通ひの人達の混雑した小家を持つ所で、精悍な敏捷な、愚直な、魯鈍な、あらゆる種類の人間の巢窟でありました。友一は散歩の往き還りなどに弟を負ぶつたきみに連れられてその傍を通る時、一種の緊張を感じないではゐられませんでした。彼は共鳴と好奇心と、同時に警戒の入り交つた複雑な心持から、その群の方へ熱心な一瞥を投げて通るのでありました。

「杉田、杉田」

「やあ、赤、トルコ帽。」

人ずれのした、少年の一群は、自分の仲間以外の者に對してはきつと執るべき態度の如く信じてゐた或種の敵意と、嘲弄的の示威を、彼にも示す事を怠らなかつたものと見えます。これに對して、背中の弟が、彼等の反感の的になつた赤いトルコ帽の頭をもたげながら、ぼかんとした無邪氣な驚愕を報ゆるに、友一は我となく顔を赤らめて、足早に彼等の勢力範圍を脱しようとする努めます。

而してそれが成功した時彼は怒と非難の面持できみに話しかけました。

「いけない子供達ねえ、悪口なんか言つてねえ。」

きみは彼等がしやうのないいたづら兒であると云ふ事や、純良ないゝお子様にならうとするには、決してあんな子供達と遊んではならないのだと云ふ事などを、極力訓戒するのであります。さう

言はれますと、友一もそれを信じないではゐられませんでした。けれども、同時に彼等を魅力ある好奇心の的とする事を禁ずる事は出来ませんでした。彼等のがやくした喧騒亂暴な遊戯喧嘩嘲罵の中には、自分の未だ知らない珍しい事、面白い事の無数が隠されてあるやうな氣がしました。春の末から夏へかけての陽氣に連れて、子供等の戸外の騒ぎが盛んになればなる程、彼等の事が尙ほ多く目に觸れました。

「一緒に遊びたい。あの仲間に入りたい。」友一は斯う云ふ言葉を口にする勇氣はありませんでした。又自分の此の頃の理由のない不満や、あてどもない憧憬の底には、この一つの願望が横たはつてゐるのだと云ふ事を、自分でははつきり意識する事も出来ませんでした。にも拘らず、彼の目は戸外の

新たな對象——これまで殆ど異邦人視してゐた一群——の上を離れる事が出来なくなつたのであります。それと今までの自分は、自分が如何にも幼稚なものとして、窃かに憫笑してゐる三つの弟と、大した差異のない境遇に安んじてゐた事を恥ぢるやうな氣が起りました。彼は何かにつけ兄らしく、年長者らしく、即ち優越者らしく振舞はうと致しました。而してそんな心持から、外出の折など、これまで頼りにしてゐたきみの保護を輕蔑し出しました。彼はすべてに自由な獨立した行動を取りたがつたのであります。その一例として、始めて彼の自信ある決心を實行したのは、家から五六町の距離に在る郵便函へ、お父様の手紙を入れに行つた事でありました。

「お父様、僕が行つてよ。僕一人で行けてよ。きみやなんか來な

くたつて大夫夫よ。

彼は熱心に頼みました。今まではよく郵便局に隨いて行つても、又赤いポストのぐると廻轉する玩弄物のやうな面白い孤形の差入口に、手紙やハガキを投込まして貰つても、直接自分に命ぜられた用事ではありませんでした。それを今度はどうしても自分の責任を以て果さうとしたのであります。彼は渡された二つの封書と一枚の葉書を握つて駈け出しました。而して床屋の角を曲つたり、湯屋の横町を抜けたり、電車道の橋を渡つたりして、首尾よくその信書をポストに入れて歸つた時には、彼は一つばし大した仕事を仕遂げたやうな得意と誇りを感じました。且自分でさう感じたばかりでなく、父母やきみたちからもえらい事としてそれを褒められた時には、彼は目を輝かして悦びました。

*白川野上榮一郎夫人、小説家

(野上彌生子)

一九 冬より春へ

(一) 春の先驅

一雨ごとに温暖さを増して行く二月の下旬から三月のはじめへかけて、櫻梅の蕾も次第にふくらみ、家陰の雪も漸く溶け、灰色な地には黄色を増して來た。楽しい春雨の降つた後では、濕つた梅の枝が新しい紅みを帯びて見える。長い間雪の下になつて居た草屋根の青苔も急に活き返る。心地の好い風が吹いて來る。青空の色も次第に濃くなる。羊の群でも見るやうな、さまざまの形した白い黄ばんだ雲

が、恰も春の先驅をするやうに、微かな風に送られる。

私は春らしい光を含んだ西南の空に、斯の雲を注意して望んだことがあつた。ポツと雲の形が現はれたかと思ふと、それが次第に大きく、長く、明らかに見えて、南へ動くに随つて消えて行く。すると復、第二の雲の形が同一の位置にあらはれる、そして同じやうに展開する。柔かな蒼色の空に、灰色を帯びた白い雲が遠く浮かんだのは美しい。

(二) 星

月の上るは十二時頃であらうといふ暮方、青い光を帯びた星の姿を南の方の空に望んだ。東の空には赤い光の星が一つ掛つた。天にはこの二つの星があるのみだつた。

山の上の星は君に見せたいと思ふものの一つだ。

(三) 第一の花

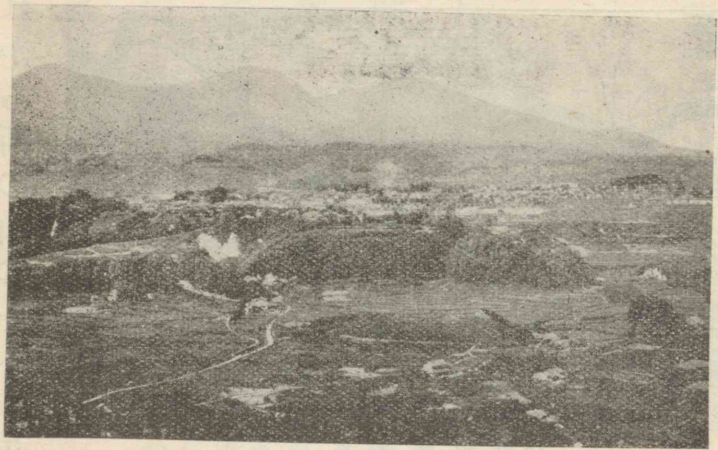
「暑い寒いも彼岸まで」とは土地の人のよく言ふことだが、彼岸といふ聲を聞くと、ホツと溜息が出る。五箇月の餘に亙る長い冬を漸く通り越したといふ氣がする。その頃まで枯葉の落ちずに居る榊、堅い大きな蕾を持つて雪の中で辛抱し通した石楠花、一つとして過ぎ行く季節の記念でないものはない。

学校の教室から見える櫻の樹は、幹にも枝にも紅い光澤を持つて來た。家に歸つて庭を眺めると、土塀に映る林檎や柿の樹影は何時まで見て居ても飽きない程面白みがあ

る。暖くなつた氣候のために化生した羽蟲が、早軒端に群を成す。石垣の間には、いたち草・小豆草・蓬・蛇草・人參草・嫁草・大薺・小薺、其の他數へきれない程の草の種類が頭を擡げて居るのを見る。私は三月の二十六日に、石垣の上に白い小さな薺の花と、紫の斑のある名も知らない小さな草花とを見つけた。それが斯の山の上で見つけた第一の花だ。

(四) 山上の春

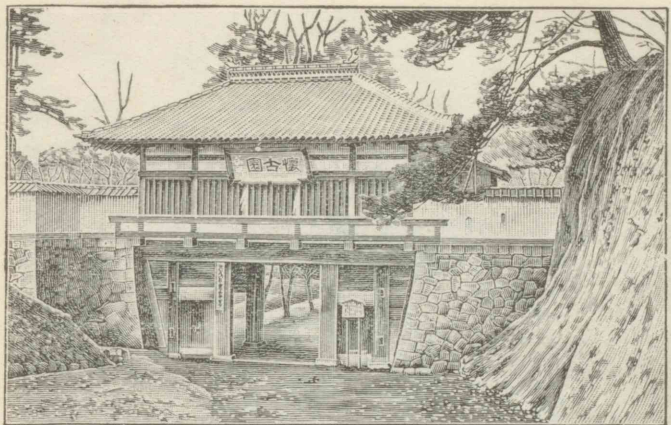
貯へた野菜は盡き、葱・馬鈴薯の類まで乏しくなり、さうかと言つて新しい野菜が取れるには間があるといふ頃は、毎朝毎朝若布の味噌汁でも吸ふより外に仕方のない時がある。春雨あがりの朝などに、軒傳ひに土壁を匍ふ青い煙を



小諸町全景

眺めると、好い陽氣になつて來たとは思ふが、食物の乏しいには閉口する。復油臭い凍豆腐かと思ふと、あの黄色いやつが壁に吊されたのを見てもうんざりする。淡雪の後の道をびしょびしょ歩みながら、草餅はいりませんか。と呼んで來る女の聲を聞きつけるのは嬉しい。三月の末か四月のはじめあたり、都會の方へ出掛けて、そ

れから斯の山の上へ引返して来る時ほど氣候の相違を感



小諸城址懐古園

ずることはない。東京では櫻の時分に、汽車で上州邊を通ると梅が咲いて居て、碓氷峠を一つ越せば輕井澤はまだ冬景色だ。私は斯の春の遅い山の上を見た眼で、武藏野の名残を汽車の窓から眺めて來ると、ア、柔かい雨が降るな。とさう思はない譯には行かない。でも輕井澤ほど小諸は寒くないので、汽車でこゝへやつて來るに随つて、枯れくゝの感

じの残つた田畠の間には勢よく萌出した麥が見られる。黄に枯れた麥の舊葉と、青々とした新葉との混つたのも、離れて見るとなかく、好いものだ。

四月の十五日頃から、私達は花ざかりの世界を撞に楽しむことが出来る。それまで堪へて居たやうに梅が一時に開く。梅に續いて直櫻、櫻から李、杏、菜萸などの花が、白く私達の周圍に咲き亂れる。臺所の戸を開けても、庭へ出掛けて行つても、花の香氣の満ち溢れて居ないところはない。懐古園の城址へでも行つて見ると、短いながらに深い春が私達の心を酔はす。

(島崎藤村)

*名は春樹
小説家
詩人

二〇 早春

(一) 水邊小情

江の北に冬はあゆみ去つて、
岸邊の丘は黄色き青みをもちて臥す。

春は今、そこにうかがふ
まだうら若い蘆の芽と蘆間の水。

南に麥隴ひらけ、
國ひろく、雲しづかに、鳥かすみ鳴く。

水澤のたま藻の花よ、はやく咲け、
海道の木瓜の紅きもはやくさけ。

ゆくりなく逢ひたる友と
我は語る、春の旅人。

(二) あぜ道

荒くはふむな畦道を、
浅葱の色に萌え出でて、
まだやはらかき嫩草が

春待ちかねて生ひたるを。

やうく形とゝのうて、

四ッ葉ばかりになりたるを

見れば愛らしなつかしし、

荒くはふむな畦道を。

(三木羅風)

二一 忘れ難き日

・ 嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れし

は、恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬまでに消失せぬ。「健在なれ、再び早く相見ん」との別の言葉は尙耳に響き、最後の握手は尙掌に感ぜられつゝも、見渡せば、白鷗飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、己に霞の中に入りనికి。

嗚呼、かくて相別れたる我が友、今いづくにかある。彼はその夜、西の方足柄を過ぎて、清見潟のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて、五年後の今日此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤

影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ましむ。

「三月、君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見瀉の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜、月明らかに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄に倚りて靜かに君を思ひ、うたた人生遭逢のはかなきを歎きぬ。」

人生遭逢のはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に残し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。

見渡せば、有^{*}渡の山影幽かにして、袖^{*}師の松原は雨に靡なり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、悉く暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、これ彼が久戀懷慕

^{*}静岡縣安倍郡久能山の別稱

^{*}三保松原の一部

^{*}静岡縣安倍郡不二見村龍華寺

の處なり。此の夜、此の風光、これ彼が消魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は己に歸り來つれど、彼の風姿は今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫で、今夜五年前の今日の別離を忍んで彼が遺文に對す。嗚呼、我此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。此の夜、此の風光、空しく思慕の深く恨の長きを加ふるを如何にせん。

されど徒に憂ふるを已めよ。人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらず。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂しみを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神

相接せしむ。友此處にあり、悠久の夜亦此處にあり。彼が遺文、餘薰新にして、我が思慕、日毎に彼に通ず。清見灣頭、今宵雨しめやかにして、夜靜かなり。形は見えねど、彼は我と語り、我は彼に接し、松風・濤聲亦時に款語に入り來る。嗚呼、平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴なはん。

歲月水と流れ去つて、五年の昔を今に返す由なけれども、神相接しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見灣の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗か

*號を嘲風といふ
文學博士
宗教學者
東京帝國大學教授

れ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。
(姉崎正治)

二二 高館 (一)

有明の空に不如歸が啼く。短夜の明け離れんとする黎明頃、高館のあたりは俄かに物騒がしくなつた。時は文治五年閏四月三十日。常陸坊海尊ふと目を覺まし、中門の傍に走り出て見渡せば、こは如何に物物しき軍兵が十重二十重と高館を取圍む。海尊大聲揚げ、

「是はいづくの軍兵で、何用あつて斯くは騒ぐぞ。」

と言ふ。侍大將と思しきもの、馬を大門の下に寄せ、

「判官殿御謀叛の噂隠れもない。出羽奥押領使藤原朝臣泰衡、勅命により、まつた鎌倉殿の仰を蒙り、此まで推參致した。斯く申す某は、泰衡の御内人江刺小次郎信重でござる。判官殿には尋常に御自害ありて然るべく存じまする。」

すは、一大事の起りたりけるよ。昨日まで夢更に知らざりしは、一大不覺と、海尊取敢へず辨慶以下の御内人を起し、月見御所に馳せて、此の由を判官に啓する。高館の騒ぎは一方でない。

鎬矢一つ遠鳴して屋の棟にすつくと立つ。伊勢三郎龜

井六郎・鷲尾三郎・片岡八郎以下の面々各、身仕度する。辨慶は兼房と打連れ立つて月見御所に駈けつける。判官起ち上つて鎧を着ける。北の方には先年もうけられたる姫君を抱いて、唯涙に咽ふばかりである。

「殿斯うあらうとは武藏ちつとも存じませなんだ。一生の大不覺、何とも御詫びの致しやうもござりませぬ。秀衡殿卒去後一年ばかりは懸念な致しましたが、もうよかるべうと存じましたるは取返しのかかぬ過ち。武藏も年老いたるかと思ひ、遺恨にござりまする。」

さすがの辨慶齒をくひしばつて、大粒なる涙をほつりぼつりと落す。判官ちつとも騒がず、

「天意であるぞ、人間業の致す所ではない。そち達の不覺ではなうて、義經の命數ぢや。今日は義經の運も窮りたるぞ。義經生年三十一歳、潔う此で自害を致さう。頼みに致した陸奥平泉が斯うなつては、義經もう落ち行く所はない。故秀衡ぬしの卒去が身の不幸、又泉三郎は一昨日念珠の關へ發足したとやら、これ亦身の不幸。いや、是は泰衡が遠ざけたる謀であらう。永らく汝達に憂き目を見せて、眞に氣の毒なことにてある、容してくりやれ。」
北の方が抱ける兒に目をつけて、

「おう、其の姫も不幸な兒であるわ。思へば、靜の生みし男子は由井の濱に沈められたとやら、其の兒も平泉で蕾の

うちに散り往くのぢや。義經の子と生れたのがいづれも不仕合。後世はよい所に生れ變りて、よい日の光を見や。北の方にもさまざまの憂き苦勞して、此までおざつたにはかないことになつて痛はしい。是も義經に連れ添うたる身の不幸、あきらめて給はれ。」

愁然として語る判官の辭に、いづれも腸をちぎらるる思ひであつた。北の方は固より辨慶兼房も一語を發し得ぬ。唯すすり泣きの音が忍びやかに聞える。

外の方には遙に矢叫びの聲がする。戦ふものは誰ぞ。伊勢三郎か、龜井六郎か、片岡駿河・鷲尾か。辨慶奮然と起ち上る。

「武藏が最後の働き致して、平泉の腰抜けどもに末代の語り草と致させくれませう。さらば我が君御免、是が今生の御暇乞にござりまする。」

二三 高館 (二)

九郎判官源義経は小櫻緘の鎧に黄金の龍頭をつけたる胄を着け、弓杖ついて月見御所の縁に出て、征矢三つ四つ敵に向ひて射かけ、騎馬武者二三騎射て落す。此の時、髪を大童に取亂し、血汐にまぶれて駈け來るものがある。近づけば是なん片岡八郎判官の前に跪き、

「合戦も今が最後と見えまする。今生にて今一度君に拜

顔致したうて、棄つべき命を存へて推參致しました。伊勢三郎鷲尾三郎兩人の行方は能うも知れませねども、これも討死致したとかと察しまする。其の他の御内人は皆勇ましい最期を遂げました。武藏坊は大長刀を車輪の如くに廻して敵軍中に躍り入り、名宣りを上げて散散に切り靡け、衣川のほとりにて長刀杖に立ちはだかり、叡山西塔に育ちたる武藏坊辨慶が舞を見よ、蝦夷の奴原が孫子の語草にせよと、瀧の水日は照るとも絶えず、とふたりとふとふたりと舞ひました。も舞はすんだ、かゝれやかかれ、蝦夷どもの胄を首諸ともに衣川に流してくれうと、切り靡けましたる、其の働きのすさまじさ、見る目も

面白うおざつたれど、射かけた矢は蝟の如く其の儘衣川に立ちながらの最期、天晴なる討死でおざりました。某亂軍の中を切り開いて此まで参りましたが、よき敵と引組み、刺し違へて死なん所存、一足お先に三途の川にてお待ち仕りませうぞ。武藏坊以下の面々、さぞや待ち居ることにておざりませう。三途の川は山伏姿でなうても、威張つて通られまするか、と存じます。さらば我が君おさらばでおざります。と語りも息苦しげに見える。判官黙禮し、

「火が揚らば義經の最期と思へよ。」

片岡八郎の跡見送つて黯然たることしばし。

「兼房居やるか。」

「あつ。」

と畏まつたるは、白髮頭の増尾十郎權頭兼房。

「義經まつた北の方の介錯は汝に頼うだぞ。」

北の方と姫君とを具して判官は持佛堂に入り、心徐かに胃と甲とを脱ぐ。

「さらば今生の限りにてあるぞ。よう御佛に念佛申して西方彌陀の浄土を頼まれよ。」

北の方は掌を合せて徐かに稱名し、

「何事も前世の因縁、親子夫婦主従が皆一同にあの世に参りますもの、もう悲しみも嘆きも致しませぬ。未來永

劫お傍に侍ひますると思ひますれば、いつそ嬉しうおざりまする。早う御手にかけさせ給へ。」と凛々しく仰せられる。判官は今更のやうに悲しく痛はしく、

「其の健げなる辭を聞くと、どうやら胸も塞がるやうぢや。ぢやが、女々しうなうて、如何にも勇ましいよい覺悟ぢや。義經は運拙くとも、御身といひ、靜といひ、武藏以下の面々といひ、斯うまで忠誠忠誠しく仕へくれる人達を持つて果報者ぢや、世にも稀なる仕合せものぢやと嬉しう存ずる。思ひ残すところは更におざらぬ。南無阿彌陀佛。」年來肌身離さぬ守刀はするりと鞘を脱した。紫の電はさ

つと迸る。

「兼房、北の方の介錯致せ。」

わつと兒の魂ぎる聲が聞える。

一團の黒煙は持佛堂から渦を卷いて噴き出る、つづいて紅の火焰が迸る、火の粉は流星の如く降り注ぐ。梁の落ちる音、柱の倒れる響。火は持佛堂から月見御所に吹きつける。一面に紅蓮の海、焰の浪。

其の焰の裡に屹然突立ちたる判官の顔は火に輝いて、又なく勇ましく、凛々しく、神々しく、悲壯なものであつた。

(笹川臨風)

*名は種郎
文學博士
國史學者

二四 晩春の別離

時は暮れ行く春よりぞ
 また短きはなかるらん。
 恨は友の別れより
 さらに長きはなかるらん。
 君を送りて、花近き
 高樓までもきて見れば、
 緑に迷ふ鶯は
 霞空しく鳴きかへり、
 白き光は佐保姫の

春の車駕を照らすかな。

これより君は行く雲と
 ともに都を立ちいでて、
 懐へば、琵琶の湖の
 岸の光にまよふとき、
 東、伊吹の山高く
 西には比叡、比良の雪
 日は行き通ふ山々の
 深きながめをふしあふぎ、
 いかにすぐれし想をか

沈める波に湛ふらん。

流は空し法皇の

夢杳かなる鴨の水、

水にうつろふ山城の

みやびの都行く春の

霞めるすがた見つくして、

畿内に迫る伊賀伊勢の

鈴鹿の山の波遠く

海に落つるを望むとき、

いかに萬の恨をば

空行く鷺に窮むらん。

春去り行かば、青によし

奈良の都に尋ね入り、

としつき君が戀ひ慕ふ

御堂のうちに遊ぶとき、

古き藝術の花の香の

伽藍の壁に遣りなば

いかに韻を身にしめて、

深き思に沈むらん。

さては、秋津の島が根の
南の翼、紀の國を
回りて進む黒潮の
鳴門に落ちて行くところ、
天際遠く白き日の
光を泄らす雲裂けて、
目にはるかなる遠海の
波の躍るを望むとき、
いかに胸うつ音高く
君が血汐のさわぐらん。

または名に負ふ歌枕、
波に千とせの色映る
明石の浦のあさぼらけ、
松萬代の音に響く
舞子の濱のゆふまぐれ、
もしそれ海の雲落ちて、
淡路の島の影暗く、
狭霧のうちに鳴き通ふ
千鳥の聲を聞くときは、
いかに浦邊にさすらひて
遠き昔を忍ぶらん。

げにやみやびを戀慕ふ
 君にしあれば君がため
 藝術の天に懸かる日も
 時を導く星影も、
 何れ行くへを照らしつゝ
 深き光を示すらん。
 さらば名残はつきずとも、
 袂を別つ夕まぐれ、
 見よ、影深き欄干に

煙をふくむ藤の花、
 北行く鴈は大空の
 霞に沈み鳴き歸り、
 彩なす雲も愁ひつゝ
 君を送るに似たりけり。
 あゝ、いつかまた相逢うて、
 もとの契をあたくめん。
 梅も櫻も散りはてて、
 すでに柳はふかみどり、
 人はあかねど行く春を

いつまでこゝに停むべき。
われに惜しむな家づとの
一枝の筆の花の色香を。

(島崎藤村)

二五 鳳凰堂

四月の末、舊曆十日ばかりの月の光が、そろりと落日の空を明るくしかける黄昏の折であつた。細長い宇治の町を通り抜け、縣の森の少し先を北に曲つて、平等院の東側の築土の盡くるところから、こんもりした青葉の徑を更に左へ踏分けると、路がだんく下り坂になつて、宇治川の堤に掩はれて居る平たい窪地の緑蔭の底へ潜つて行かうとす

*Symmetrical

る時、忽ち密樹の枝を透かして、下の方から鳳凰を戴いた二重瓦屋の搏風が、ちらく隠見し始める。坂を全く降り切つて、シムメトリカルな堂の正面に迂回してしまふ迄、左右の廻廊の柱の間隔や檐の角度が、一步步々に變化し、絶えずさまざまの優雅な態度を示してくれる。運動の關係を逆にして考へれば、堂が中央に舞を舞つて居るやうなもので、臺の波のさす手ひく手の緩やかな踊り振りは、五六羽の鳥の翼をはたかして群がり騒いで居るやうな感じを與へる。阿字池の汀を傳うて、建物の眞正面へ來れば、堂は次第に寫眞で見る通りの端嚴均齊な姿勢を保ち、落着いた相を現ずる。藤原時代の榮えと誇りと威嚴とを、重々しい線力

に罩めて、曲折高低の勢を作つて居る建築の立派さは、まこ

とに驚嘆せざるを得ない。

夕闇の池の面は、腐つた水が澱ん

で居ながら、寧ろ硝子を張つてある

やうに冷たく堅く平たく見える。

大理石の廊下へ物象の映るくらゐ

の鮮かさに、堂の影が倒さまに映じ

て居る。

八百年の星霜を経て、生存の力の

稀薄に成つた建物が、水面に泛ぶ影

と共に平安朝の幻の如く立ち現れ



鳳 風 堂

て、暫く虚空に樓閣を描き、私がちよいと眼を閉つて居る間に消えてしまふかと危まれる。大方夕暮の月の光と日の光とが互に融け合つて、神祕な色彩を堂の周圍にひた〜と漂はせて居るせいであらう。深い木立の隙までもぼんやりと薄明るく見えて、臺の鳳凰が眞黒に聳えて居る後の空は、丁度十四五年前に流行した石版畫のやうな青味を帯び、晝と夜とが刻々に領分を争ひ續けてゐた。

鳳凰堂はいつ行つても見られるかも知れない。併し天地が幽玄な羅衣を被つて、夢の世界のやうな現象を呈して居る一瞬間に、私の頭へ刻まれた第一印象は、當分忘れまいと思ふ。

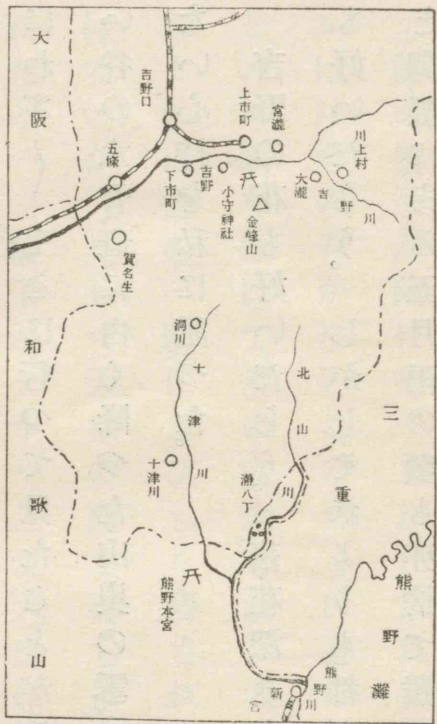
(谷崎潤一郎)

二六 山川の今昔

吉野といつても、今の人の行く處は、吉野朝の跡の残つてゐる處だけでも、つと奥まで入つて行くやうな旅客はめつたにない。

持統天皇が行幸になつたり、柿本人麿が長歌を詠んだりした吉野は、今の普通にいふ吉野でなくつて、ずつと奥の宮瀧・大瀧あたりであるといふことを知つてゐるものは澤山ない。しかし、天武天皇が當時隱遁された袖振山のあとが、今の吉野町の中にあることを考へると、昔にあつては、そこらを一面に總稱して吉野と呼んだらしく思はれる。萬葉

集にある象谷あたりは、吉野でも殊に興味の多いところであらねばならない。



吉野も昔は吉野郷の中に入つてゐたらしい。それにして、吉野にはいろ／＼な古跡

がある。後醍醐天皇が高野山を頼つて五條あたりまで行幸になつたのに、山徒が急にそれを拒んだので、已むなく賀名生のやうな山の中に入つておいてになつたさまもそれ

とはつきり想像され、ば、高野山が拒んだといふので、吉野の山徒が急に勤王に傾いて行つたさまもそれと點頭かれるやうな心持がする。私は天皇のおいてになつた十二月にわざ／＼そこに行つて見たことがあつた。淋しい、淋しい谷の水音、斑に白く降つた山奥の雪、すべて何とも言はれない心持を私に誘つた。

吉野の花も好いだらう。落花深きところ南朝を説くのも好いだらう。しかし、それよりも都だにさびしかりしを^{*}と御製にある五月雨の頃も亦捨て難いではないか。また枕の下に石走る谷川の音の殊に際立つてきこえる、冬のさびしい吉野も好いではないか。晩秋のある夜更けて、旅舎

^{*}古陵松柏吼、天懸、山寺尋、春春寂寥、眉雪老僧時停、簪、落花深處説、南朝、藤井竹外

^{*}都だにさびしかりしを雲はれぬ吉野の奥の五月雨のころ 後醍醐帝御製

^{*}花にれてよしやよしのの吉水の枕の下に石走る音 後醍醐天皇御製

の二階の欄干から月の向うの山巒に落ちかゝるのを見た時には、私は何とも言はずに唯ぢつとそこに立盡くした。

藤原簾子が敵に捕へられた恒良親王等のために、名にしおはば神のちかひのこのまゝに心の闇を照らせとぞ思ふ。といふ歌を捧げて、その安全を祈つた子守神社が、依然としてその山道の一隅にさびしく残されてあるのも面白いではないか。そして天皇の寵を専らにしたために、天下が亂れたといふ簾子が、三十一二で天皇に侍して隱岐へ行き、三十九で天皇の崩御に逢ひ、それからまだ二十年も生きて、五十九で、これよりもつと奥の草鞋がけの旅客でも容易に入つて行くことの出来ないやうな、吉野川の上流、川村高原に

墓となつてゐるのは、更に更に深い悲しい人生を語つてゐるではないか。

吉野から大瀧・迫大瀧を経て、小倉宮や尊秀王の遺跡のある處を通つて、入しほの波な温泉から大臺ヶ原山の方へ行く路は、たまには入つて行く旅客もあるけれども、また金峰山に上る行者や、洞川から十津川を経て熊野の本宮へと出て行く旅客も、一年の中には澤山あるらしいけれども、どうしたものか、東熊野街道をずっと南して、祖母そぼ谷やを越して、北山川の源流地方から、屈折窮まりない北山溪に添つて路を瀨八町の方まで出て行つた旅客は、殆どないと言つても好いほど寥々たるものである。その癖、そこには非常に勝れた溪潭

がある。瀨八町と拮抗して決して劣らないやうな、または熊野川の峡谷と比較しても、決して譲りはしないやうな溪谷がある。その溪は岩石に逢つて幾度となく屈曲してゐる。恰も串で團子を貫いたやうに、折れつ曲りつ流れてゐるのであつた。そして、この溪谷は二十里近くも續いてゐる。いかに健脚の旅行家でも、一度その谷に入れば、二夜はその山の中のさびしい旅舎に泊らなければならぬ。そればかりではなく、この一條の山道は日本建國の歴史に於て、ことに記憶されなければならぬものである。何故といふのに、この山道こそは神武天皇の通つて行かれた路であるからである。八咫鳥を先導にして、この深山の中を大

和の宇陀地方に出て、兎狛を驚かされた路であるからである。今でこそ誰も通るものはなくなつてしまつて全く地方的間道になつてしまつてゐるけれども、昔にあつては、熊野の海岸地方から大和に出て行く、最も近いまた最も便利な路のひとつとして通用してゐたに相違ないのである。

田山花袋

女子新讀本 卷六終

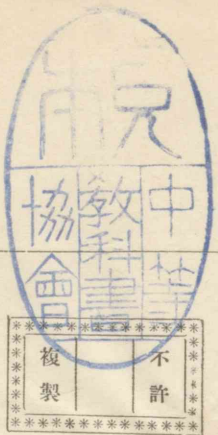
大正十五年七月十五日
大正十五年十月八日
大正十五年十月十二日
印刷
訂正
再版
再版
印刷

女子新讀本

定 卷一、二、三、四各金四拾貳錢
卷五、六、七、八各金參拾八錢
價 卷九、十 各金參拾七錢

昭和三年度臨時

定 卷一、二、三、四 金七拾錢
卷五、六、七、八 金六拾參錢
價 卷九、十 金六拾貳錢



著者	久松潜一
發行者	東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤正叟
印刷者	東京市京橋區弓町二十五番地 高橋郁

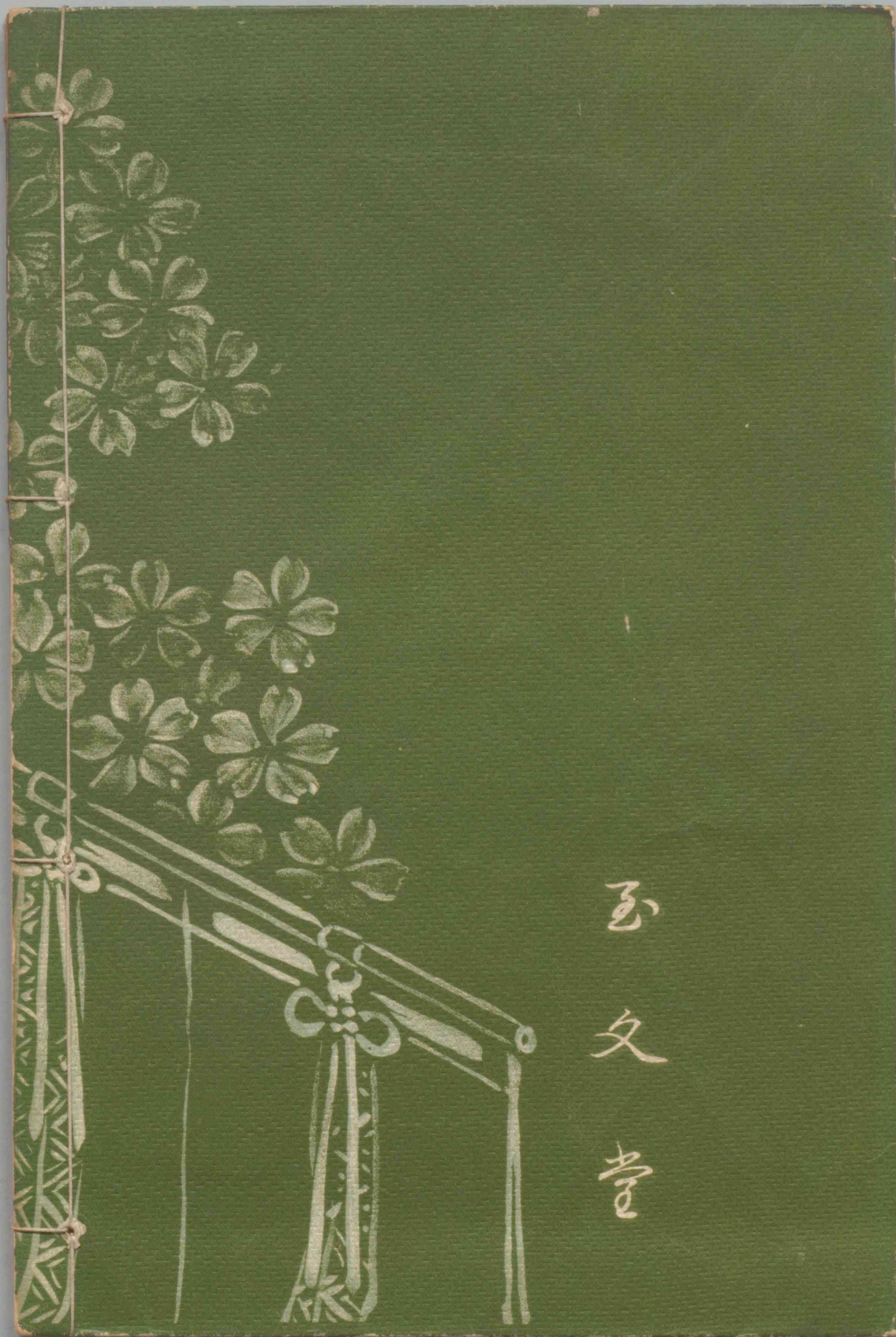
發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
振替口座東京二九五〇七番

至 文 堂
電話青山 三四四六番
三四三番

弊堂發行之教科書は供給差支無き様常に澤山製本出來準備致して居ますから若し貴地書店に品切れ等にて御差支の節は何卒弊堂へ直接御注文下さい直に御送り申上げます

(三) 印刷社會式株印局



玉文堂